猪熊古墳群

（福岡県京都郡苅田町所在の古式古墳群の調査）

1976

猪熊古墳群発掘調査団
苅田町土地開発公社

猪熊古墳群

福岡県　京都郡　苅田町大字新津字イモリ所在　古墳群の調査

本　文　目　次

第 1 章　序　　説

1. はじめに …… 1

2. 猪熊古墳群の歴史的環境 …… 2

(A) 猪熊古墳群周辺の弥生遺跡について …… 2

(B) 猪熊古墳群周辺の古墳について …… 5

第 2 章　猪熊古墳群の調査 …… 13

1. 古墳群の立地 …… 15

2. 第 1 号 墳 …… 15

3. 第 2 号 墳 …… 28

第 3 章　総　　括

1. 猪熊古墳群の年代と性格 …… 31

2. 豊前京都地方の古墳文化 …… 33

図 版 目 次

PL. 1　猪熊古墳群周辺の航空写真
PL. 2　猪熊古墳群の遠景
PL. 3　第1号墳の墳丘
PL. 4　第1号墳の石室全景
PL. 5　第1号墳石室の奥壁構造
PL. 6　第1号墳石室の側壁構造
PL. 7　第1号墳出土遺物（Ⅰ）
PL. 8　第1号墳出土遺物（Ⅱ）
PL. 9　第2号墳の墳丘
PL. 10　第2号墳の石室

挿 図 目 次

Fig. 1　京都平野の縄文・弥生遺跡の分布 …… 3
Fig. 2　犀川小出土櫃原系土器拓影 …… 2
Fig. 3　苅田町の古墳 …… 6
Fig. 4　雨窪古墳石室実測図 …… 8
Fig. 5　浜町遺跡出土土師器（小田富士雄氏原図、山中製図） …… 9
Fig. 6　ソウバル池窯址採集須恵器 …… 11
Fig. 7　猪熊古墳群地形測量図 …… 13
Fig. 8　1号墳墳丘実測図 …… 16
Fig. 9　1号墳墳丘土層図 …… 17
Fig. 10　1号墳石室天井石集成 …… 20
Fig. 11　1号墳石室実測図 …… 21
Fig. 12　1号墳出土短甲片 …… 24
Fig. 13　1号墳出土鉄器類 …… 25
Fig. 14　1号墳封土中発見の石庖丁 …… 27
Fig. 15　2号墳墳丘実測図 …… 27
Fig. 16　2号墳墳丘土層図 …… 28
Fig. 17　2号墳石室実測図 …… 29

第１章　序　　説

1. はじめに

福岡県京都郡苅田町大字新津字イモリ 811所在の猪熊古墳群は既知の遺跡であったが、苅田町土地開発公社による土地造成の申請がなされ、福岡県教育委員会と協議の結果、事前調査の運びとなり、猪熊古墳群発掘調査団を編成し、昭和50年３月５日調査団と苅田町土地開発公社との間に委託契約を締結した。

発掘調査は昭和50年３月９日から３月31日まで行なった。

発掘調査団の編成は次のとおり。

小倉高等学校　教諭（調査担当者、団長）	山中　英彦
福岡県教育委員会文化課　技師	児玉　真一
北九州大学教務課	岡部　真知夫
福岡県教育委員会文化課　調査補助員	川述　公紀
北九州大学考古学研究会	稲田　久富　天野　俊行
神崎　哲也　岡山　計	姫野喜三雄　南　秀樹
梅田　安信　木下　勲	西川　裕子　林　尚恵
九州工業大学	石村　和寿
京都工業繊維大学	二宮　彰
同志社大学	大仁　尚俊
早稲田大学	大津山　逸郎
小倉高等学校考古学部O・B	山田　英雄　金野　義明
小倉高等学校考古学部	長谷川隆則　石松　毅彦
	久木野康記　宮本　伊織

以上の他、九州リハビリテーション大の森重康彦氏・高橋勝正氏、小倉高等学校ラグビー部O・Bの大場隆生氏・杉山茂氏をはじめ多くの小倉高等学校O・B及び在校生の協力を得た。

３月９日から地形測量を開始し、二基の円墳を確認、西から猪熊１号墳、２号墳と呼称した。３月11日から本格的に発掘調査に入り、天候にも恵まれ作業は順調に進み、１号墳の竪穴式石室、２号墳の竪穴系横口式石室を発掘、３月31日に無事全作業を完了した。

なお、地形測量及び石室実測は児玉真一・川述公紀両氏の協力を得、製図及び本書の執筆編集はすべて山中英彦が担当した。

2. 猪熊古墳群の歴史的環境

(A) 猪熊古墳群周辺の弥生遺跡について

行橋市を含めた旧京都郡内の原始・古代遺跡は、北から小波瀬川、長峡川、今川、祓川の沖積平野を望む洪積台地上に多く分布している。(Fig. 1)

この遺跡分布の状態や、新田開発の古記録[註1]からみて、現在の国道10号線付近がほぼ京都平野に於ける古代の汀線[註2]と従来から推定されている。

現在、京都平野で確認される遺跡が、全て標高10m以上の地点に存在しており、さらに郡内に於ける縄文期の遺跡が、片島、宝山、長井地区に分布し、この三地点を結ぶ範囲の海側では遺跡が確認できない。以上の点から考えると現在の行橋市の市街地一帯は少なく共干潟で、塩分の多い農耕には不適な地と推定される。

従って、苅田町の二荒山が岬状に海に突出し、その南に片島、津熊、流末、羽根木と弧状に入江が続き、行橋市の沓尾が岬となる古代地形を一応復元しうる。弥生期の遺跡の分布状態が良くその姿を示している。

旧京都郡内の弥生遺跡は標高10m以上の地点に立地し、小波瀬川の流域、延永、稗田地区、神護石の存する御所ケ岳山麓、竹並、長井の地区に濃密に分布し、石塚山古墳の所在する周防灘沿岸部の苅田町が稀薄であることが注目される。

海岸砂丘上に立地する長井遺跡は周防灘沿岸部で唯一の夜臼式、板付Ⅰ式土器検出の遺跡で500基以上に及ぶ箱式石棺を主体とする弥生前期の埋葬遺跡[註3]で西瀬戸内系の土器を含む。

五世紀代の墳丘を有す横穴墓の発見で注目された竹並遺跡は弥生前期の集落址としても重要な遺跡で、中間報告[註4]に依れば、標高50～60mの屋根上にA地区に5、L地区に14軒の住居址があり、貯蔵穴は約160個が確認されている。時期的には弥生前期末から中期初頭のほぼ単一の時期に比定されることから、該期の単位集落を把握する上で、今後の成果が大いに期待される。この竹並遺跡とほぼ同一時期の板付Ⅱ式から須玖Ⅱ式に及ぶ集落址としては、今川の上流、犀川町本庄にある犀川小学校校庭遺跡がある。この遺跡から櫃原式に酷似した文様を有する土器片が5号竪穴から発見されている。(Fig. 2)現物は遺憾ながら行方不明となっているが、木葉状文を浮彫する磨研土器である。現在小倉高校に保管中の本遺跡の土器類を分析した所見によれば、5号竪穴

Fig. 2 犀川出土櫃原系土器拓影

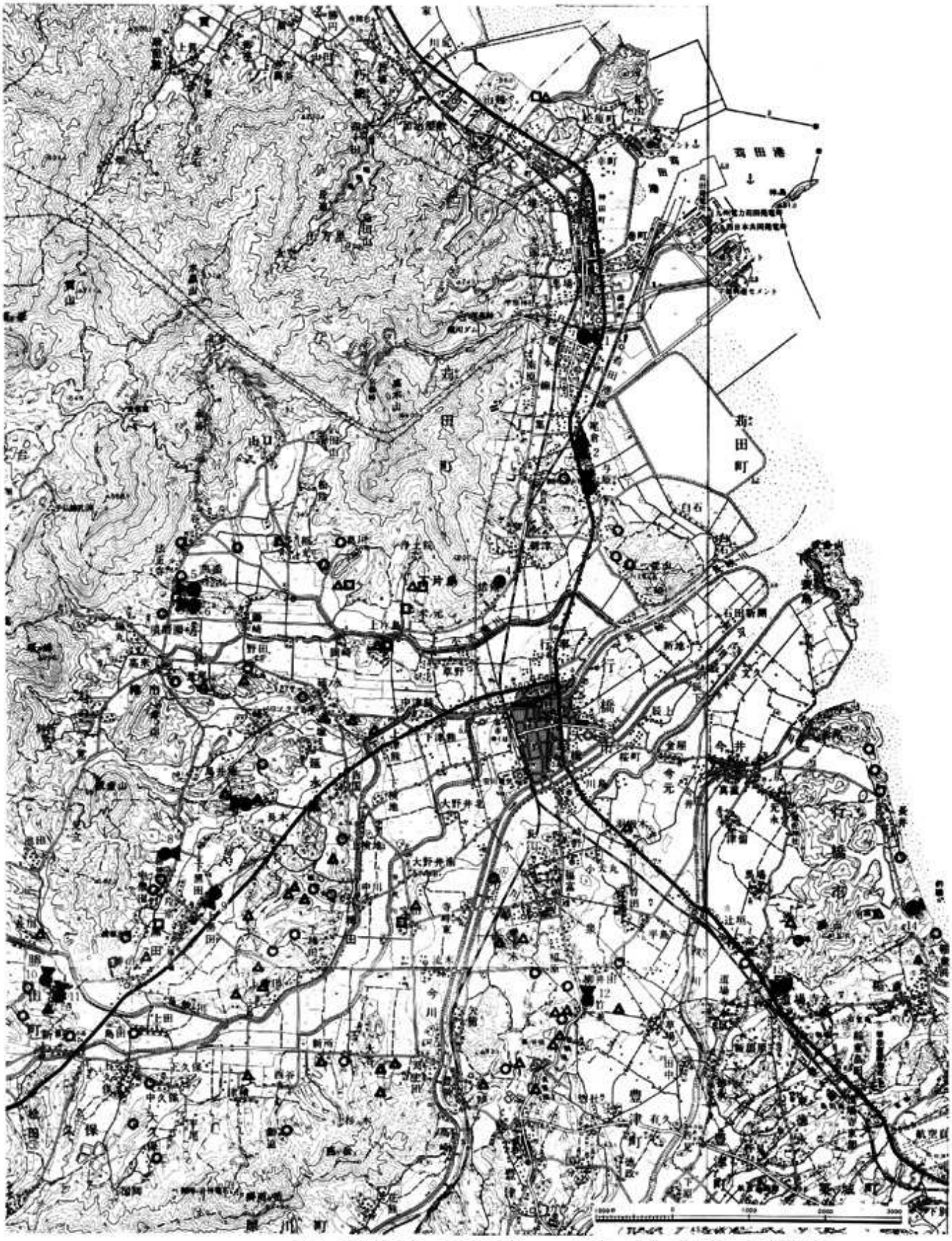


Fig. 1　京都平野の縄文・弥生遺跡の分布　（□縄文　△弥生　○箱式石棺　前方後円墳）

1. 石塚山古墳　2. 番　塚　3. 御所山古墳　4. 猪熊古墳群　5. 塚本古墳　6. 丸山古墳　7. 八雷古墳
8. 寺田川古墳　9. 庄屋塚古墳　10. 屏八幡古墳　11. 筑田丸古墳　12. ヒメコ塚　13. 甲人塚　14. 石並古墳

の出土遺物は全て板付Ⅱb式に比定されるもので、本遺跡出土土器類中には板付Ⅰ式を一片も含まないことから、板付Ⅱb式に共伴する遺物とみることができよう。この共伴関係は板付Ⅱ式と櫛原式の年代的併行を示すものとは勿論考えられぬ。

行橋市長尾遺跡も前期後半の集落址で板付Ⅱ式から須玖Ⅰ式の時期に及んでいる。この長尾遺跡に隣接する池ノ迫(註5)からも板付Ⅱ式の綾杉文を有す壺が発見されている。(註6)

弥生期の墳墓群としては前述の長井遺跡の外に稲童下井無田遺跡など海岸砂丘や洪積台地上に多くの遺跡が分布している。(註7) 概して、この地域は埋葬形式として甕棺墓に比して箱式石棺墓が多く、箱式石棺墓は弥生期から古墳期にまで連続している。弥生期の箱式石棺墓の中で、鏡鑑を副葬するものに次の三遺跡がある。何れも弥生終末期に比定されるもので、犀川町山鹿遺跡の箱式石棺（変形双獣鏡）、同遺跡石蓋土壙（小形彷製鏡）があり、同町本庄の箱式石棺からも小形彷製鏡が発見されている。(註8)(註9)

(B) 猪熊古墳群周辺の古墳について

京都平野に於ける古墳分布の概略を知るため、定村貴二氏の調査にもとづく遺跡数を表示すれば次の如くなる。(註1)

種別＼地域	苅田町	行橋市	勝山町	犀川町	豊津町	計
縄文	3	4	1			8
弥生	12	59	16	9	8	104
古墳	56	131	77	51	31	346
前方後円墳	4	5	4	4	1	18
	石塚山、番塚御所山、塚本	丸山、八雷、ヒメコ、隼人塚、石並	庄屋塚、寺田川、丸山、扇八幡	姫神、上大村本庄、大熊	惣社	豊前全体 (29)

行橋市の遺跡数が最も多いが、これは沖積平野と洪積台地に恵まれた椿市、延永、稗田、今川、泉、仲津、今元、蓑島の旧村部を合併しているためである。従って、古墳の集中度からみれば、勝山町（諫山・久保・黒田村の合併）が最も稠密であると言えよう。

猪熊古墳群の所在する苅田町は、著名な石塚山古墳があり、九州に於いて最初に畿内大和政権と直結した地域で、以後、安閑天皇代の"肝等"の屯倉の設置にみる如く、常に重視されてきた地域である。猪熊古墳群の歴史的環境として、本項では苅田町を中心に古墳を概観してゆきたい。（Fig. 3）

苅田町は貫山系の苅田山、高城山によって周防灘に面す苅田及び小波瀬地区と小波瀬川の上流、白川地区に分けることができる。

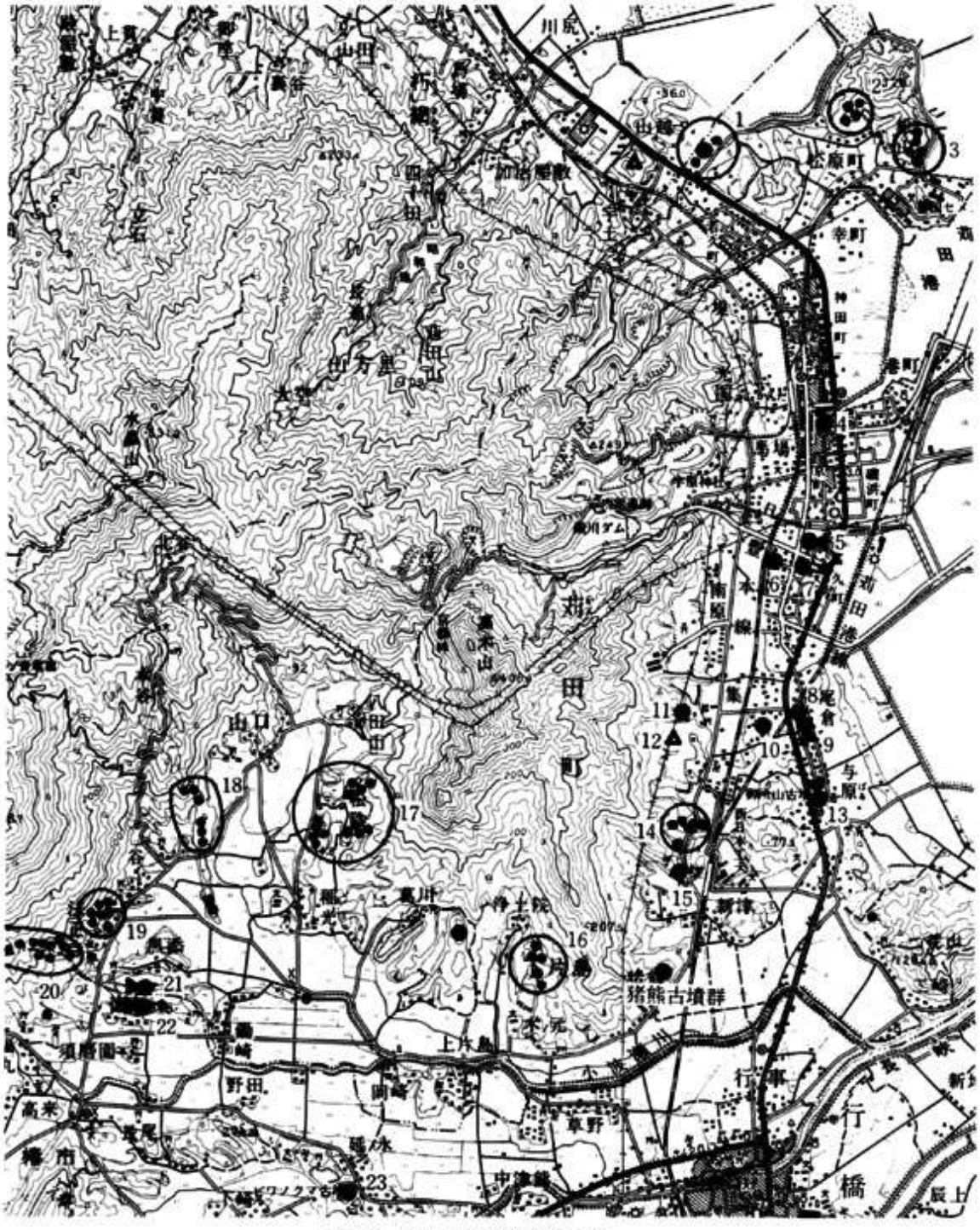


Fig. 3　苅田町の古墳文化

1　雨窪古墳群　2　松山古墳群　3　小鳥越古墳群　4　浜町遺跡　5　石塚山古墳
6　蛸の久古墳　7　塚廻り古墳　8　丸山古墳　9　番塚　10　八郎塚　11　正福寺古墳
12　ソウバル古墳(窯址)　13　御所山古墳　14　尾倉古墳群　15　恩塚　16　浄土院古墳群
17　松陰古墳群　18　神護古墳群　19　法正寺古墳群　20　黒添古墳群　21　塚ノ本古墳
22　丸山古墳　23．ビワノ隈古墳

苅田・小波瀬地区　は京都郡の北端で、北九州市小倉南区に接する位置にあり、市街化の進んだ地域である。

江戸期以来の新田開発と干拓によって、大幅に旧地形を失しているが、その工事記録等から、国道10号線に沿って分布する石塚山、番塚、御所山の各前方後円墳の立地する台地を結ぶ線を旧汀線と推定しうる。(註2) 石塚山古墳は標高約7m、番塚及び御所山古墳は標高約13m程度の台地を基盤としており、これらの台地の東端部が旧汀線と考えられる。この地域で、旧地形を残す行橋町長井から稲童に至る海岸地形と同様なものであったと思える。南北に細長く続く苅田・小波瀬地区の古墳分布は大きく、後期古墳群の集中する松山地区、九州最古の畿内型古墳である石塚山古墳のある南原地区、この地域最大の前方後円墳である御所山古墳がある尾倉与原地区の三群に分けられる。

松山地区　松山地区は苅田町の北端に位置し、北九州市小倉南区と接する。標高128mの松山が岬状に周防灘に凸出し、その山麓部に西に松山古墳群（7基）、南に小鳥越古墳群（12基）の小円墳群があり、さらに小倉区との境界に接してこの地区最大の雨窪古墳がある。雨窪古墳は径16m、高さ5.5mの墳丘を有し、石室全長10.20mの巨石作りの複室横穴式石室墳である。（Fig. 4）

南原地区　石塚山古墳は、前方部を海に向けた、全長約120m、後円部径約70m、前方部幅約10mの柄鏡式の前方後円墳で、標高7～8mの低台地を基盤に後円部高約10m、前方部高約3mの墳丘を構築している。後円部頂部中央に円形の窪地があり、寛政8年4月21日の石室発掘の跡を示している。発掘の状況については、南原村庄屋銀助の提出した書状と「宇原神社由来記」によってうかがうことができる。(註10) この記録によれば、内部主体は、古墳の主軸にほぼ平行する竪穴式石室で、全長5.4m、床面幅90cm余りの規模を有し、石室横断面は台形を呈し、床面幅に比して天井部幅は約30cm狭くなる。天井石は長さ約130cm、厚さ6～12cm程度の平らな割石を少なくとも5枚以上用いていたと推定される。副葬品は14又は11面の鏡、及び剣、矛、鏃が記録にみえるが、現存するものには三角縁神獣鏡7面、銅鏃1、素環頭太刀片1がある。7面の三角縁神獣鏡は全て舶載で、大分県赤塚及び福岡県原口古墳との間で分有する同笵鏡（No.30）2面、福岡県御陵古墳との間で分有する同笵鏡（No.21）1面を含み、石塚山古墳が九州に於ける最古式前方後円墳を有機的に結ぶ中枢をなすことがわかる。(註11)

現在、周辺部に石塚山古墳と連続する首長墓を見い出す事はできない。石塚山古墳周辺部は最も市街化の進んだ地域で、相当数の古墳が破壊されたが、わずかに石塚山の南方に径15m、高さ5.5m程度の南原蛸の久古墳及び、径約10m、高さ約3.5mの塚廻り古墳だけが残り、共に6世紀代のものである。蛸の久古墳は、以前周濠を有し石室も開口していたと伝えるが、墳丘規模からみて横穴式石室と推定される。塚廻り古墳も従来開口していたもので、複室の横穴式石室であったと聞く。この他消滅してしまったが、隣接する南原小学校庭の北東隅にも同様

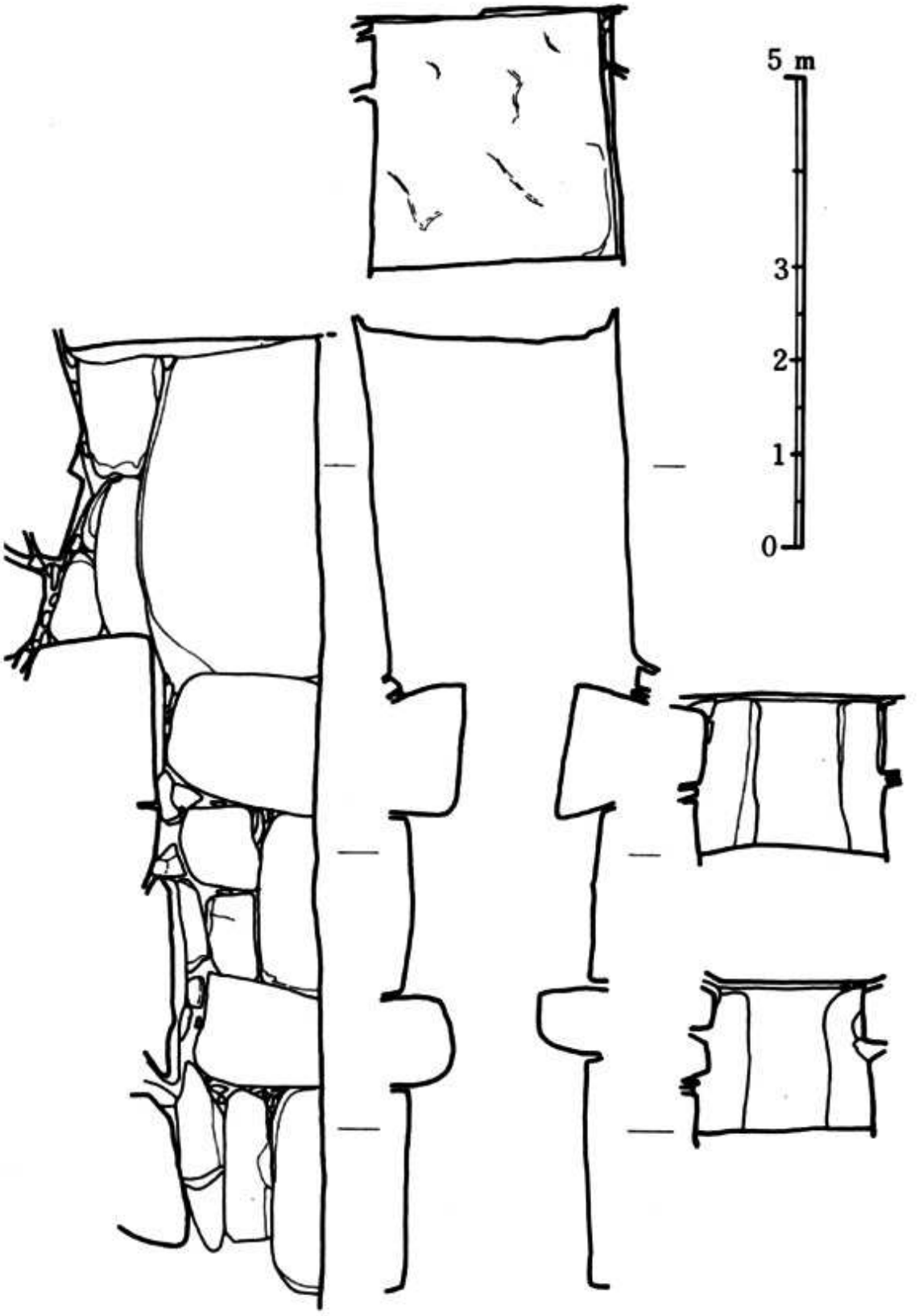


Fig. 4 雨窪古墳石室実測図

の古墳が認められた。

これらの古墳の他に石塚山古墳の北方 800*m*の地点に古式土師器を出土した浜町遺跡がある。本遺跡は、苅田町を南北に走る旧道の側溝改修工事の時、偶然発見されたもので現在はコンクリート側溝でかくされ見ることが出来ぬ。早田茂氏の採集品（Fig. 5）によれば、全て古式土師器で、小形丸底坩、球形胴丸底の甕、退化した二重口縁を有す球形胴丸底の壺、坏部に段を有する高坏などの器種があり整形技法としては刷毛目調整を多く用い研磨、撫で、削りを認める。層位関係が不明で編年的には問題があるが、小形丸底坩や二重口縁壺に有田Ⅰ式の様相を認めるものの、これらの資料がセットをなすとすれば高坏及び球形胴丸底の壺の形態から

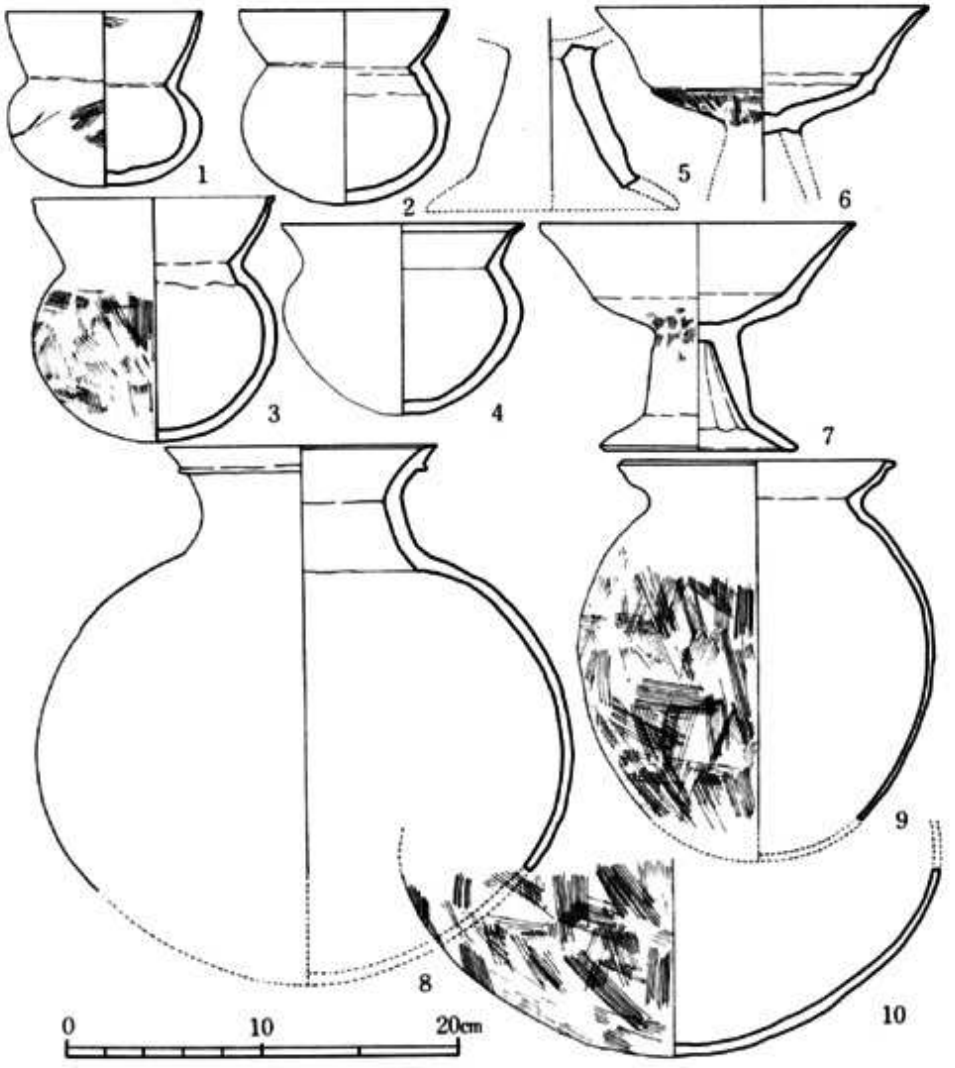


Fig. 5　浜町遺跡出土土師器（小田富士雄氏原図、山中英彦製図）

有田Ⅱ式に比定できる。少なくとも石塚山古墳の年代に後続する時期と言えよう。豊前地域に於ける該期資料の増加を待って正確を期したい。(註12)

尾倉・与原地区　南原地区の南に続く地域で、番塚及び御所山の前方後円墳が存在し、今回報告する猪熊古墳群はこの地区の南端にあたる。

昭和34年3月九州大学考古学研究室が発掘調査した番塚は主軸を南北にとり前方部を南に向け、全長約50m、後円部径約20m、前方部幅約35mの規模を有し、前方部を相当開いた形式である。(註13)内部主体は後円部封土の下底に床をおき西に開口する竪穴系横口式石室で、長さ3.5m、奥壁部幅約2m、羨門部幅1.5mの長方形の平面プランを持ち、石室高は、1.8mを測る。石室全壁面に赤色顔料を塗り、床には敷石がある。東枕に木棺内に伸展葬で2体並列した状態を認める。副葬品は、尚方作神人歌舞画像鏡1面をはじめ、硬玉製勾玉、碧玉製管玉、ガラス小玉などの玉類、鉄刀、鉄矛、鉄鏃、挂甲、胡簶金具などの武器類、須恵器、土師器などの土器類などがある。6世紀初頭に構築されたと推定されている。

番塚の南方500mに前方部を北に向け、水をたたえた周濠を有す国指定史跡、御所山古墳がある。明治20年の坪井正五郎氏の調査、及び昭和50年の苅田町教育委員会による測量調査があり、(註14)その全容を知りうる。(註14)墳丘全長118m、前方部幅82m、後円部径73mを測り、墳丘くびれ部両側に造出を設けた三段築成の県内屈指の大型墳である。内部主体は後円部上位にあって前方部（北）に開口する割口小口積の単室の横穴式石室で玄室は長さ約4.7m、幅3.0mの長方形プランで、高さは3.0m余りの大型である。玄門は幅80cm、高さ1.5mと推定される。玄室壁面に赤色顔料を施し、床面に貝殻を混えた海砂を敷く。玄室内で特筆される構造に玄室を取り囲む石障と壁面の突起があり、豊前地方には類例がなく該地方では御所山古墳固有の極めて特異な構造で筑紫国造の統轄する筑肥地区の影響といえる。副葬品には硬玉製勾玉、硬玉製棗玉、碧玉製管玉、ガラス玉の玉類や四禽四乳鏡1面の他、甲冑類、馬具類及び土器があり、5世紀後半代に比定しえよう。番塚、御所山周辺部に存在する古墳は、横穴式石室を主体とする小円墳によって構成される尾倉古墳群の他に八郎塚、正福寺古墳、恩塚がある。

八郎塚は径17m、高さ3.5m程度の墳丘を有し、全長4.7mの複室の横穴式石室で全長2.55m、幅2.2m、高さ2.7mの玄室を有す。

正福寺古墳は独立して存在する単室横穴式石室を内部主体とする小円墳で、玄室は長さ1.6m、幅1.2m、高さ1.2mを測り、短い羨道に続く。

恩塚古墳は小波瀬駅の西方、猪熊古墳の北方に存在する複室の横穴式石室を有す、径約20m、高さ4.5mの円墳である。

正福寺古墳の北にソウバル池窯址がある。（Fig. 6）採集される須恵器は全て古墳期の第Ⅳ型式のもので、小倉南区宇土地区の窯址群と平行する。なおソウバル池北方に単室横穴式石室を有す小円墳がある。

すでに煙滅した古墳の中で番塚に隣接する丸山古墳（丸山塚）が注目される。昭和17年頃、陸軍の指導の下に苅田港鉄道引込線を建設する際、封土を利用せんがために破壊されたもので横穴式石室を主体とする円墳で、金銅製挂甲、冑、鉄刀があったと伝える。現在、原位置に石碑だけが残され明確にし得ないが、玉泉大梁氏編の「福岡県史・第一巻上冊」の中に「小波瀬にある丸山円墳は直径百十九尺でこの地における最大円墳である」という記述があり、直径35.7mの大円墳であったと推定されその消滅が惜しまれる。

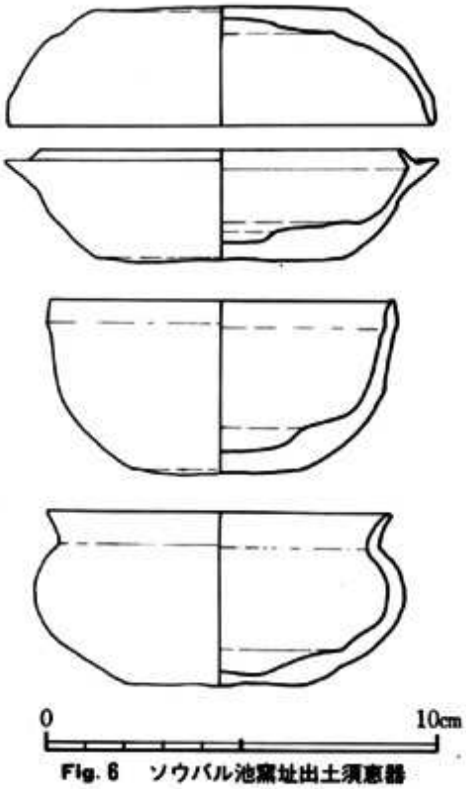


Fig. 6　ソウバル池窯址出土須恵器

白川地区　西の平尾台、東の高城山にはさまれた小波瀬川上流の平野部で、南は行橋市に接する。下片島、浄土院を中心に郡内では縄文遺跡が最も多い地域で弥生期の遺跡も多く、早くから開けた地域である。箱式石棺墓は小波瀬川に面する麓部に点在する。河口の二荒山の西麓天神池遺跡、白川地区の葛川石棺群、稲光古墳群、古川石棺群などがあり、弥生から古墳期に渉る。古墳は山麓の低丘陵上に分布し、行橋市との境界、黒添の塚ノ本前方後円墳を除けば、横穴式石室を主体とする後期の小円墳が群集した古墳群を形成するものが多い。

代表的なものに浄土院古墳群、松陰古墳群、神護古墳群、法正寺古墳群、黒添古墳群などがある。

浄土院古墳群は獅師ケ谷池東の直径10m、高さ3m程度の12基以上の小円墳群で、うち一基は複室横穴式石室を主体としている。

松陰古墳群は消滅したものを含めて3～4の支群に細分しうるが破壊が激しく細部を明らかにし得ない。21基の横穴式石室を主体とする古墳群である。

神護古墳群は、6基の径20m以下の円墳が現存し、南から1号～6号墳としている。うち三基の内部主体を観察することが出来るが、1号墳は全長約4.5mの単室の横穴式石室で、玄室は、長さ1.8mに対し幅は2.08mと主軸に対し横長の長方形プランを示す。2号墳は全長約5mの片袖式の単室横穴式石室を有す。奥壁は幅2m、高さ1.9mを測り一枚石を用いる。最高部にある5号墳は白川地区中最大の巨石による複室横穴式石室で全長11mに及ぶ、玄室は長さ、幅共に約2.4mで正方形プランを有す。玄室の平面プラン及び片袖式の構造など、豊前の

地域では余り類例のない特異な石室である。

法正寺古墳群は、3以上の支群に細分される可能性が強いが30基程度の小円墳群で、内部主体は単室及び複室の横穴式石室である。この古墳群中にも、神護寺古墳群で指摘した特異な石室構造が若干認められる。

黒添古墳群は行橋市との境道に沿って 70基程度の円墳が標高 80mから 250mの間に群集する、後期古墳群の典型である。内部主体は、単室及び複室の横穴式石室である。黒添の塚の本前方後円墳は、行橋市徳永の丸山前方後円墳と同一丘陵上に共に、西に前方部を向け並行して存在する。塚の本前方後円墳は全長 24m、前方部幅 14m、高さ 4.6m、後円部径 13m、高さ 5.2mの古式の様相を示す前方後円墳である。 墳丘に葺石、埴輪等を認める。 隣接する丸山古墳は全長約40mで、戦時中横穴式石室が破壊され、鉄刀、冑、馬具が出土したと伝えている。

以上、本古墳群の所在する苅田町の古墳を概観してきたが、本古墳群は北に最古式の畿内型古墳たる石塚山古墳を始め、五世紀代の前方後円墳たる番塚・御所山古墳をひかえ、南に弥生以来ひらけた生産地たる京都平野を望む要衝にあることが知られる。周防灘沿岸部に、五世紀代の古式古墳が連続するが、甲冑副葬の竪穴式石室を有する本古墳群もその一環を形成するものである。

第1章　脚　注

註1　定村責二編「美夜古平野の遺跡」復刊京都郡誌所収1975　を柱に、文化財保護委員会編「全国遺跡地図（福岡県）」を利用して作成した。

註2　伊東尾四郎編「京都郡誌」第四章、第四節、往時の新地開発の項。

註3　小田富士雄・定村責二「福岡県長井遺跡の弥生式土器」九州考古学25・26　1965。

註4　佐田茂、赤崎敏男他「豊前・竹並遺跡の調査」九州考古学51　1976。

註5　定村責二「福岡県行橋市長尾遺跡調査報告書」行橋市教育委員会　1964。

註6　小田富士雄「豊前京都郡発見の弥生式土器」九州考古学5・6　1958。

註7　小田富士雄「福岡県行橋市海岸の弥生式墳墓」九州考古学11・12　1961。

註8　小田富士雄「豊前京都郡発見の三重墓」古代学研究20　1959。

註9　原口信行「箱式棺内出土の内行花文鏡」考古学雑誌40—3　1954。

註10　小田富士雄「畿内型古墳の伝播」古代の日本、3九州　所収　1970。

註11　小林行雄「古墳時代の研究」1961。

註12　小田富士雄「有田遺跡の土師器とその性格」有田遺跡、福岡市教育委員会　1968。

註13　渡辺正気「番塚」苅田町　1960。

註14　石山勲他「史跡御所山古墳保存管理計画策定報告書」苅田町教育委員会　所収　1976。

註15　小田富士雄・石松好雄「九州古墳発見甲冑地名表」九州考古学23　1964。

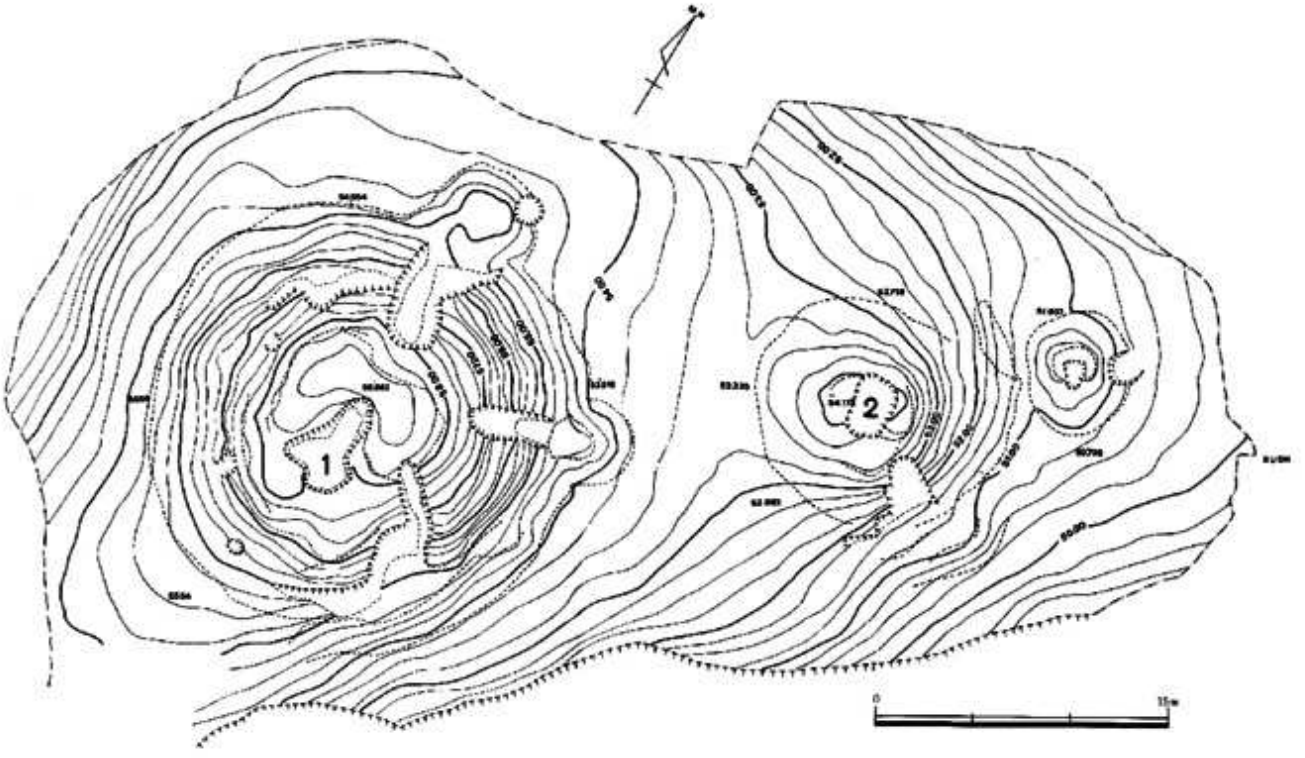


Fig.7 [illegible]

第 2 章　猪熊古墳群の調査

1.　古墳群の立地（Fig. 7、PL. 1・2）

猪熊古墳群は標高405*m*を測る高城山の支脈南端、標高50*m*の東にのびる尾根上、苅田町大字新津字イモリ 811番に所在する二基の円墳である。本古墳の立地する屋根は、舌状台地状を示し、東端部中央は尾根鞍部の平坦面と比べて約3*m*程度の隆起をもつ。本古墳群はこの東端部の自然地形を利用して、その上に構築されている。西から1号墳、2号墳と呼称する。なお、2号墳東にみる直径5*m*程度の墳丘状の盛り上りは、調査の結果、古墳でないことが判明した。

京都平野及び周防灘沿岸を一望しうる景勝の地で、眼下に小波瀬川が流れる。南北に続く周防灘沿岸の苅田、与原地区と京都平野の接点にあたり、前章でのべた旧地形でいえば海岸部にあたる。古墳群の東北2*km*に番塚及び御所山の両前方後円墳が、西南2*km*の台地上にビワノクマ古墳が、南5*km*、京都平野を間に置いて竹並遺跡、稲童古墳群などがある。本古墳群は海岸部に分布する古式古墳の一環をなすものである。

2.　第 1 号 墳

本古墳群の主墳で、竪穴式石室を主体とする比較的大形の円墳である。墳丘の随所に盗掘壙があるが、その割に墳丘は比較的良くその旧態を伝えている。現在の墳丘最高標高は58,662*m*を示す。

墳　丘　（Fig. 8・9、PL. 3）

屋根鞍部を利用した円墳で高4.2*m*、直径19.5*m*の規模を有す。

墳丘部の大きな盗掘壙をはじめ、北・東・南の三方向から深い盗掘壙が入る。墳丘頂部の盗掘壙は、内部主体の竪穴式石室に達し、その排土が墳丘南に流れている。ために、最も破壊の激しい墳丘中央部は原状を示していない。

石室主軸に直交する東西トレンチ及び主軸平行の南北トレンチ（Fig. 9）の観察によれば、墳丘下底面に構築時の旧地表に続く黒色土層が残っている。それによれば、旧地形は墳丘中心部がやや高く、墳裾部に行くに従って下る。石室はこの旧地形の高所を床面として利用して構築している。東及び西の墳裾部では地山整形を行ない墳丘を画す。黒色土層を削除し地山を削

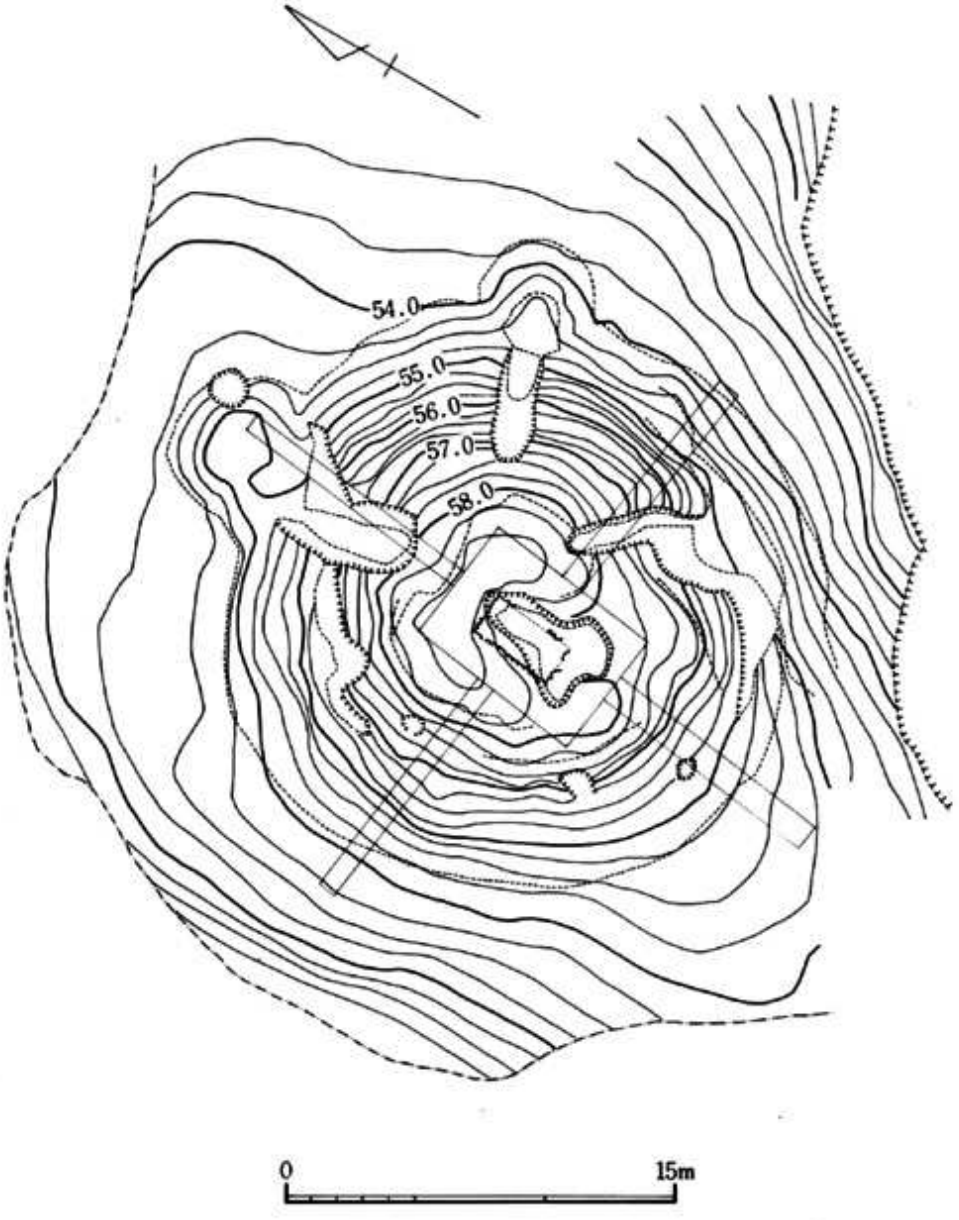


Fig. 8　1 号墳墳丘実測図

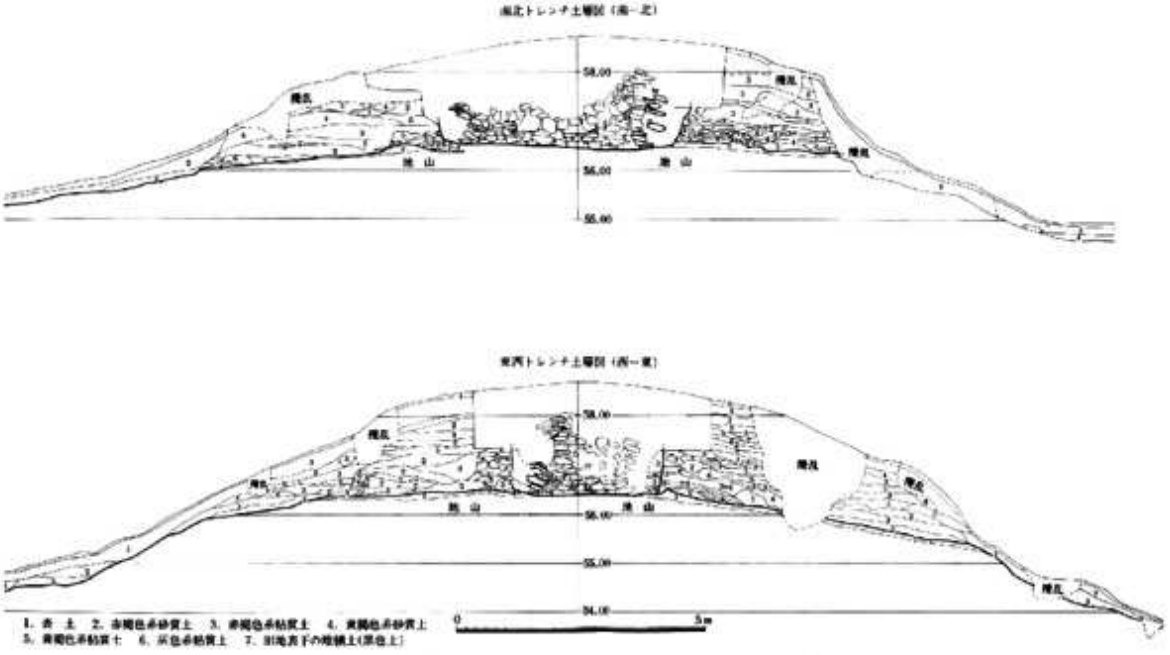


Fig.8 1号墳陽炎土層図

平している。この地山整形下端の傾斜変換点をもとに直径19.5mの墳丘規模が推定できる。地山整形によって出来た低平な円錐台状の基盤は、東裾端部で標高54.6m、西裾端部で標高54.3m、平坦面の中心で標高56.4mを測り、直径約16mの平坦面をもち、比高1.8m～2.1mの規模を有すことが知られる。

墳丘の封土は、この円錐台状の基盤に盛られる。現在の墳丘頂部標高は58.662mで、少くとも約2.2m盛り土をもつことが確認できるが、石室北壁の最高点（標高58.08m）からみて約2.3m程度の盛り土をもつこととなる。従って、本古墳の高さは地山整形の比高平均値1.9mを加えて約4.2mと復元される。

封土の版築は墳丘中心部では、灰色系・赤褐色系及び黄色系の粘質土を多く用い、良く敲き締め、墳丘上部は赤褐色系の粘質土及び砂質土を多く用いやや雑に積んでいる。赤褐色系及び黄色系の土壌は、本丘陵の地山と一致し地山を削除して盛ったと推定できるが、シルト状の灰色系粘質土は極く小片の弥生式土器を含み、丘陵下周辺の低地から運ばれたものである。東トレンチを掘削中、石室寄りの地点から石庖丁の完形品が不注意にも掘り上げられてしまったが、この石庖丁も灰色系粘着土からと推定される。灰色系粘着土は墳丘中心部の要所に用い、石室及び墳丘の強化に役立てられている。

墳頂部からの盗掘のため、石室の土壙上端を完全には把み得ないが、現存する土壙上端部は石室主軸で東西幅3.1m、南北長5.06mで隅丸長方形のプランを呈す。土壙の断面は東西ではほぼ垂直であるに対して、南北のそれはやや緩るやかに傾斜する。この土壙中に約20cm西に偏して石室を構築している。土壙の切り込みが、墳丘面から入るのか否かについては明確にし得なかった。

内　部　主　体　（Fig. 10・11、PL. 4・5・6）

本墳の内部主体は、主軸をほぼ南北のN14°Eにとる竪穴式石室である。墳丘頂部の盗掘壙の落葉や腐蝕土を清掃しただけで、石室がのぞくほど相当激しく破壊され、天井石の多くは室内に崩落し、一部は墳丘上に放置されていた。側壁の中で東壁は特にひどく、南・北隅付近にわずかに石積みを残すのみであった。側壁から引き抜いた石材は南壁側に放置されていた。Fig.11にみる南部の石材の殆んどがそれである。不幸中の幸というか石室プランを知るポイントは良くのこっていた。

竪穴式石室は床面で全長3.32m、北壁幅1.63m、南壁幅約1.60mの長方形プランを呈し、石室の幅と長さの比は2となる。基底部から割石の小口積をする純正な竪穴式石室である。石室の高さは北側面で最高1.65mまで壁面が残るが、ほぼ原状を保つと思える。

床面は5cm大の河原石を用いた礫床で、その一部が西壁南側にみられる。礫床に用いた石材は石室北壁上の墳丘表面に層をなして放置されていた。その状態から考えると盗掘時石室内に殆んど土砂の流入がなかったと推定される。礫床に用いた石材（河原石）には赤色顔料を全く

認めなかった。

側壁は千枚岩の割り石を小口積みで構築し、北壁部では17～18段の積みを認めた。遺体の頭部と推定される北壁及び両側壁の北側は、比較的細かい割り石を用い、両側壁及び南壁ではやや大型の石材を用いている。西壁の中央部は特に顕著で、大型の石材を集め、南北壁に接近するに従い細かくなる傾向がみられた。

石室の断面は、奥壁（北壁）が垂直であるに対し、両側壁は持ち送り内傾している。原位置を保つ西側壁と奥壁のコーナーの石材の交錯部でその状態を知ることができる。原位置を保つ西側壁の内傾の角度から復元すれば、石室天井部では石室幅約1*m*と推定しうる。

石室内及び墳丘南に堆積する盗掘の排土中から検出した天井石と思える8個の石材は、長さが1.1*m*を越えるもの5個、1*m*のもの3個で、前者の幅の合計は2.35*m*、後者のそれは1.38*m*である。(Fig.10) 従って、全長3.32*m*の本石室を覆うためには、1.1*m*を越える5個の天井石だけでは不足することとなる。未検出の天井石石材があるのかも知れぬが、幅1*m*の3個の石材は明らかに側壁の石材ではなく、長1*m*のものも天井石に利用したと推定できる。天井部での石室幅が約1*m*と推定される事から、小形の天井石は大形の天井石に持たせ懸けるか、南及び北壁面に半ば懸けるかして架構したものと思える。天井石の順番を正確に掴むことは出来ないが、Fig.10—1・2は石室北側から3～7は墳丘南部の排土中から8は南側床面から出土しており、奥壁（北壁）部に大型の石材を用いた事が推察される。

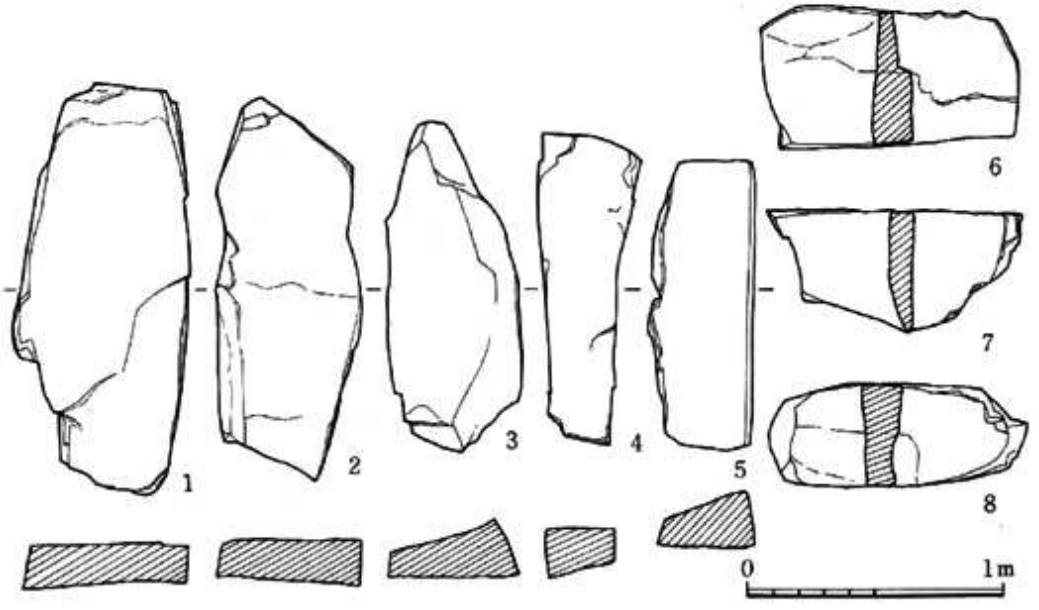


Fig.10　1号墳石室天井石集成

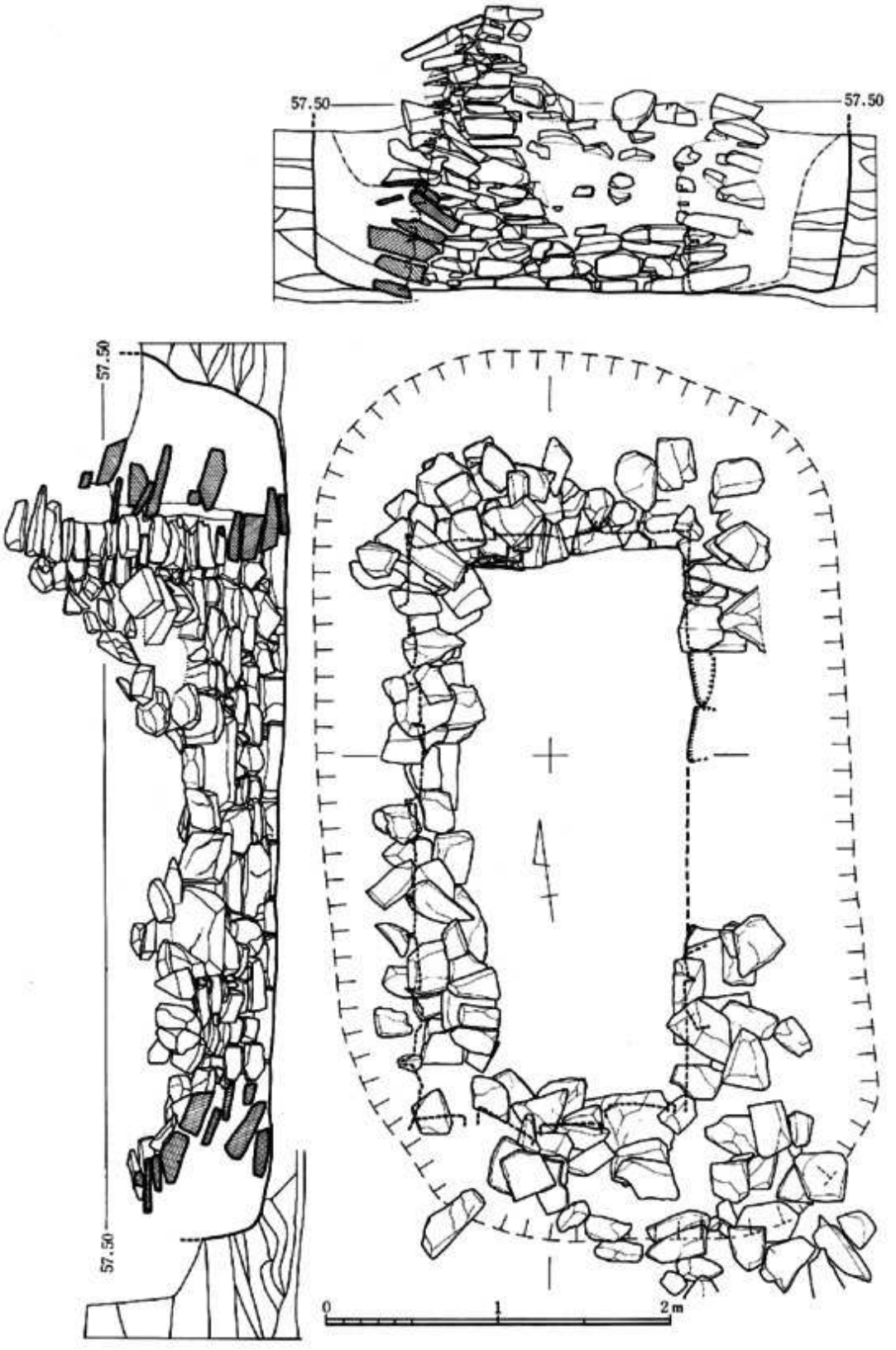


Fig.11 1号墳石室実測図

北壁面の構築は、壁を構成する石材の裏にもう一列控え積みをしているが、他の壁面では余り明瞭ではなく、コーナー付近のみに控え積みを認める略式化の傾向がある。

竪穴式石室に通有の赤色顔料の塗布は、床面を含めて全くみられなかった。石室を構成する石材は、わずかに花崗岩がみられるだけで他は全て、この地区で産出する千枚岩である。

遺物出土状況

徹底した盗掘のため殆んど遺物を検出し得なかったが、礫床が残った石室中央・西壁に接する地点で、短甲の裾部破片が副葬原位置を保って発見された。原位置を保つ裾板片と鉄銹の分布によって裾幅43cm程度のものと推定できる。この他、墳丘南側の側壁上部から盗掘の排土に混じって、小札片、甲冑片、鉄鏃片及び刀子片を検出した。

直接本墳と関係を有すものでないが、墳丘封土中の灰色系粘着土から出土した完形の石鉋丁1個がある。

遺　物　(Fig. 12・13・14、PL. 7・8)

本墳は盗掘墳で、検出した遺物は副葬品の一部にすぎない。遺物はすべて鉄製品で、副葬原位置を保つものは短甲片だけである。石室構造から本来、鏡及び玉類を持つ可能性が強く、盗掘によってそれらが抜き去られた事が惜しまれる。

〔 短　甲 〕　(Fig. 12、PL. 7)

石室中央の西側壁に接して発見された短甲の裾部を中心とする。

床面に残った短甲裾部 (Fig. 12—1、PL. 7) は幅23.8cm、高4.7cmで覆輪を除けば連続する一枚の鉄板 (裾板) である。裾板は石室床面に残る覆輪部の鉄銹痕等によって、幅約43cm、奥行き約30の楕円形の平面を有すと推定される。裾端部の覆輪は、幅1.2cmの細長い薄い鉄板で裾板を挟み込む鉄覆輪の手法を認める。裾板上端は途中で欠損し、その本来の高さを知り得ない。

盗掘の排土中から発見した鉄片の中で短甲片と思える資料が5点ある。(Fig. 12—2～6 PL. 7) これらの鉄片の中で2・3は鉄覆輪があり、短甲上端の押付板の一部と思える。2は、覆輪部がやや内湾し前胴の湾曲部といえよう。対照的に3は覆輪部が外湾し、後胴押付板の一部であろうか。2・3共に鉄覆輪は裾板と同様に幅約1.2cmの細長の鉄板を用いている。4～6は地板の重ねが認められる破片である。4は幅3.3cmの縦位の鉄板に二枚の横位の鉄板が重ねられており、前胴の引合部と推定される。5・6は胴部の地板の重ねを認める鉄片である。地板間の重ねは、鉄銹のため明確にできぬが鋲留と思える。なお、1～6の鉄板の厚さはすべて2.5mm～3mmである。

集約すれば、本古墳出土の短甲は、裾板幅約43cm、奥行き約30cmの鉄覆輪鋲留短甲といえる。胴部地板が三角板か横矧板かは残念ながら資料からはつかみ得なかったが、鉄覆輪や衝角付冑との組み合せからみて横矧板の可能性が強い。

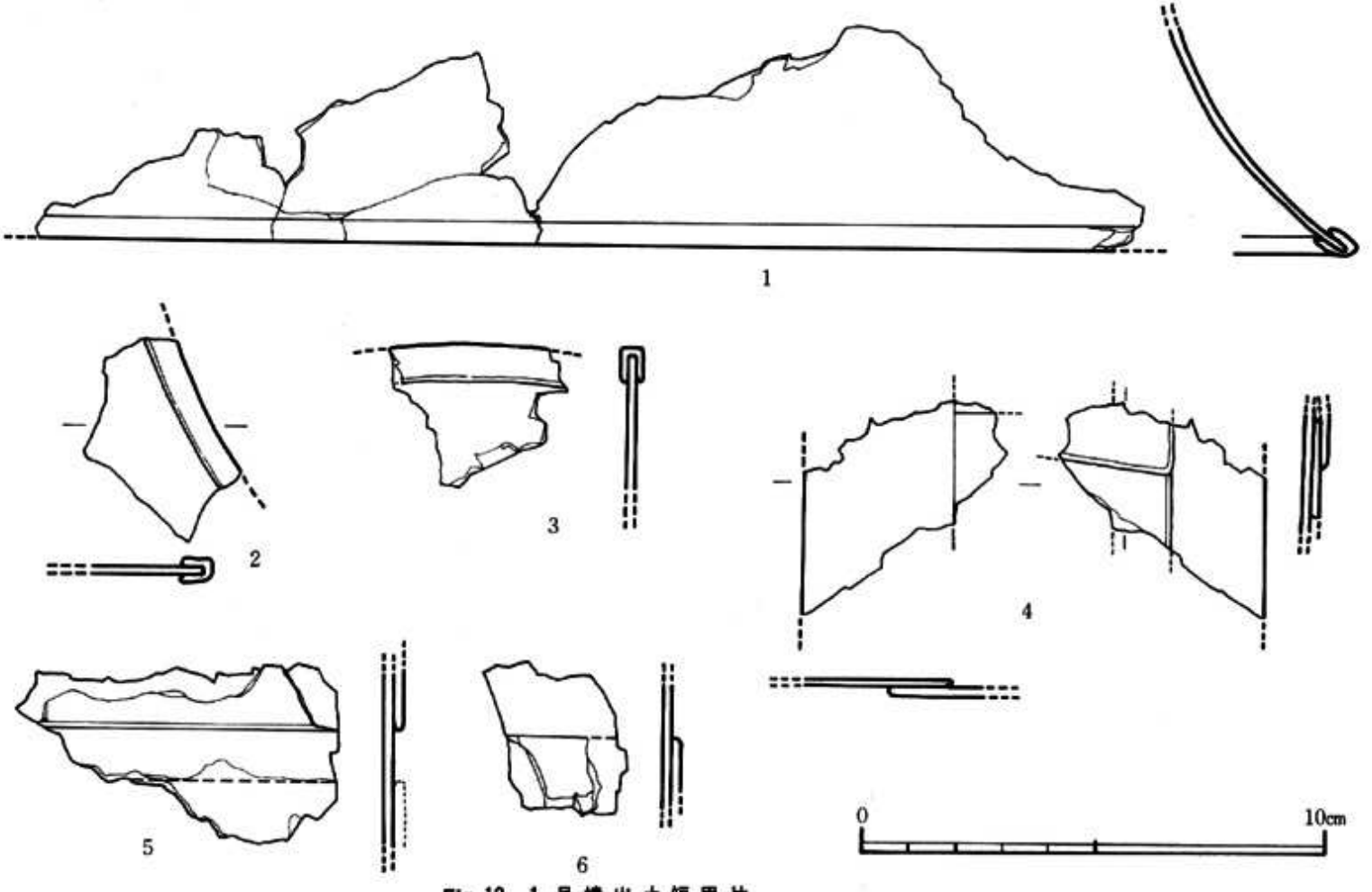


Fig. 12 1号墳出土短甲片

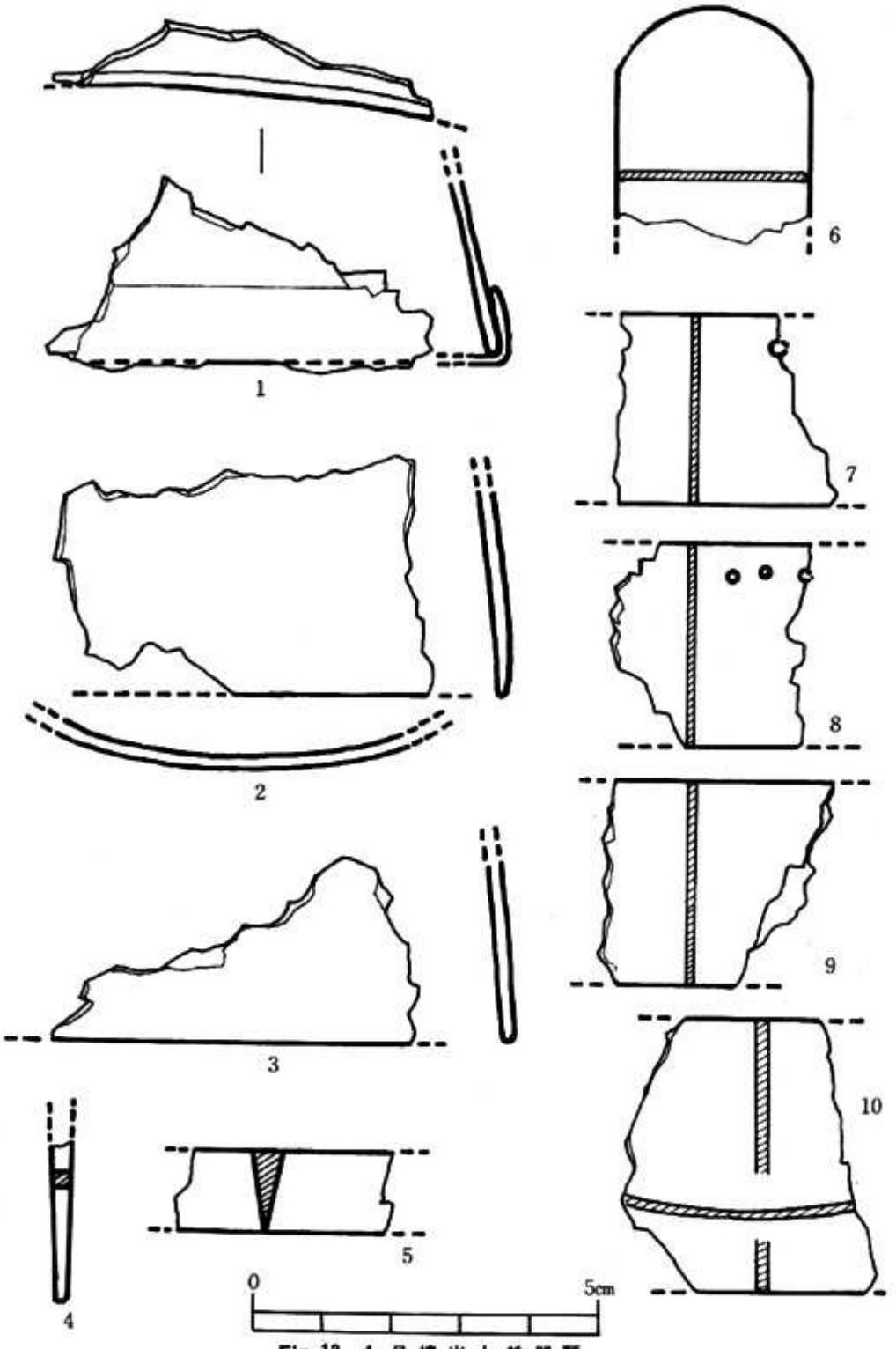


Fig. 13　1 号 墳 出 土 鉄 器 類

〔 **衝角付冑** 〕 (Fig. 13—1～3、PL. 7)

すべて盗掘排土中の出土品で、衝角付冑の破片と推定される鉄片である。

1は、ほぼ直立する鉄板を端部を 1.1cm直角に折りまげた鉄板で外から重ねている。二枚の鉄板は共に3mmの厚さを有し、大きさは幅 5.5cm、高 2.6cmの破片である。この重ねのあり方から、衝角付冑の衝角部に近く腰巻板に外から衝角底板を重ねた部分の破片と推定される。小林謙一氏の編年によれば、横矧板鋲留衝角付冑としては最新の手法となる。1の鉄片には鋲を確認できぬが、当然鋲留であろう。(註)

2・3は腰巻板と推定される3mmの厚さを有す鉄片で、上端部を共に欠いている。2は湾曲度が強く、後部で、3は左側部の腰巻板の部分といえる。

〔 **小札類** 〕 (Fig. 13—6～10、PL. 8)

前述の甲冑類に付属する小札類などの破片が認められた。

小札片と思える破片の中で6は円頭部を完存するもので、幅 2.9cm、厚 1.2mmを測る。円頭上部から 3.3cm下まで残っているが、穿孔は全くみられぬ。

7は、幅 2.8cm、厚 1.0mmの薄い鉄片で、片側のみ直径2mmの一個の穿孔がある。

8は、幅 3.0cm、厚 1.0mmで7と同様片側に直径2mmの穿孔が等間隔で少くとも3個連続している。

9は8と同じ幅3cm、厚1mmの鉄片で現存する部位には穿孔がみられぬ。

7、8の破片の穿孔は革綴孔を示すが、2つとも一方だけで、対称的位置に無い事が注目される。

10は、幅4cmのやや湾曲する厚1cmの薄い鉄片である。

6～10の薄い鉄片は6を除いて、すべてその両端を欠いており用途を断定し得ないが、革綴の穿孔のあり方に特異な姿をみ、これらの鉄片は甲冑類に付属する草摺又は鎧板の一部かと思える。

〔 **鉄鏃及び刀子** 〕 (Fig. 13—4・5、PL. 8)

4は鉄鏃の茎の末端部で、断面正方形を示し、末端部に向ってその幅を減ずる。

5は断面長三角形を呈す平造の刀子刀身部で、幅 1.1cm、鍛造品である。

〔 **封土中の石庖丁** 〕 (Fig. 14、PL. 8)

前述の如く、墳丘封土のシルト状の灰色系粘質土中から検出した弥生期の砂岩製の磨製石庖丁である。外湾形片刃形式で背寄りに間隔 1.3cmの二孔が両面穿孔されている。厚さ8cm、最大幅11.5cm、背から刃部まで4.9cmを測る完形品である。

(註) 小林 謙一 「甲冑製作技術の変遷と工人の系統(上)」考古学研究80 1974。

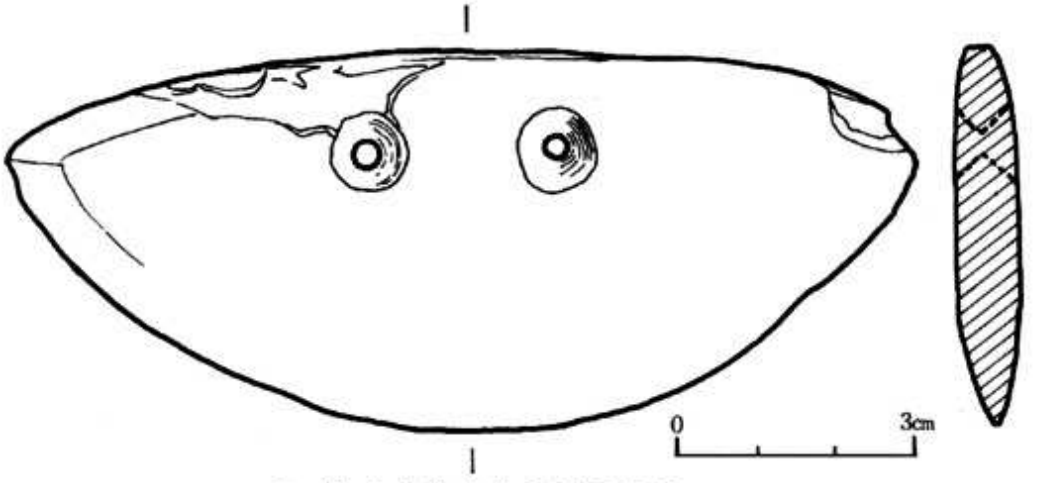


Fig. 14　1 号墳封土発見石庖丁

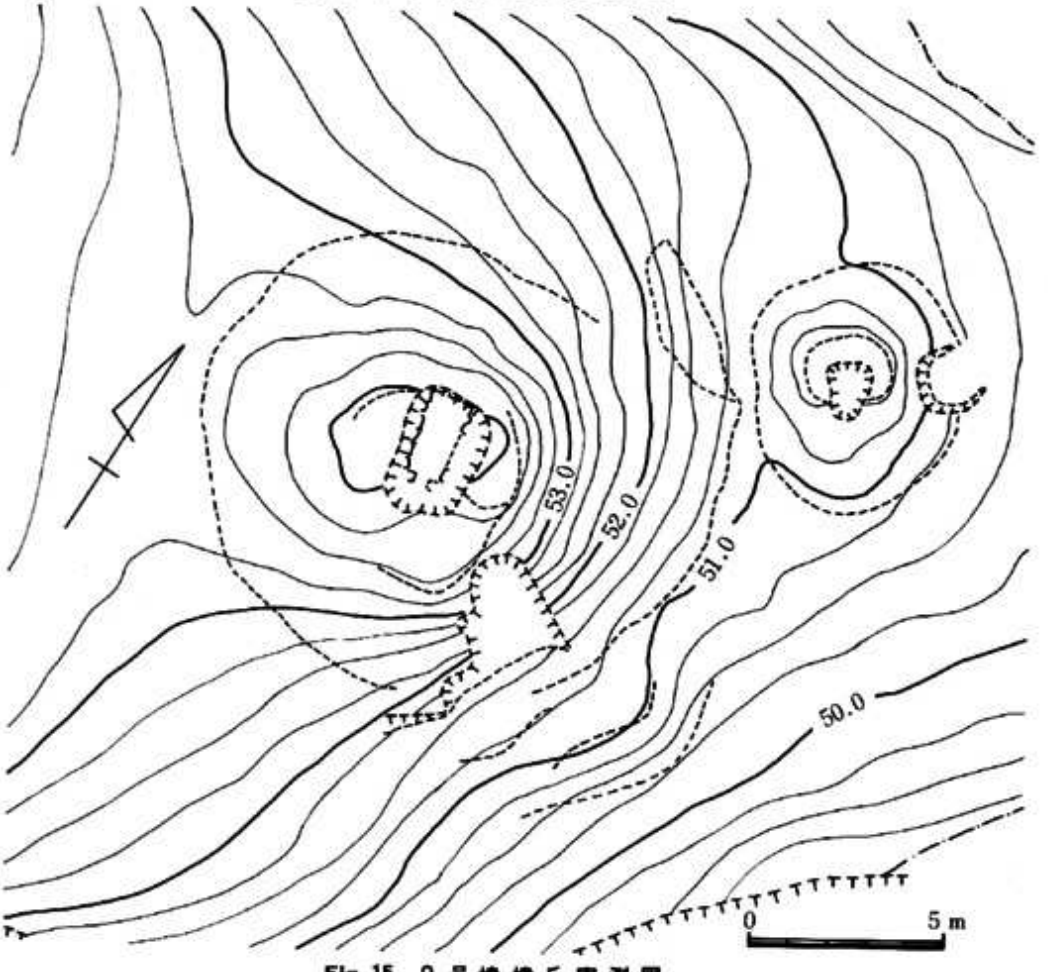


Fig. 15　2 号墳墳丘実測図

3. 第 2 号 墳

墳丘中心間26*m*の間隔を置いて、1号墳の東に所在する南に開口する単室の横口式石室を有す小円墳である。盗掘墳で、墳頂部及び墳丘南部に盗掘壙を残し、周辺部に石室の用材が若干散乱していた。現存する墳丘頂部の標高は54.173*m*である。

発掘の結果、盗掘は完全に石室に達し、石材すら大半を失しており、墳丘中央部は原状を残さぬことが判明した。

墳 丘 (Fig. 15・16、PL. 9)

墳頂部の盗掘壙中に石室の一部がのぞく状態で、墳丘中心部はかなり変形している。

古墳はゆるやかに東に流れる自然地形の尾根先端に立地する。墳丘の東西トレンチの土層によれば、墳丘西側の地山は平坦で、東側は傾斜しており、自然地形の傾斜変換点をほぼ墳丘中心部においている。従って、封土の築成は西側で薄く、東側で厚い。

墳丘の基盤は、地山上の堆積層をならす程度で、旧地形を良く残し、その上に封土の築成を行っている。封土の築成は平坦地の西側ではほぼ水平に、傾斜地の東側では比較的緻密な版築を示す。

墳丘の裾端部は、旧地形の堆積層を除去し、地山面まで削平整形している。この地山整形部を基に墳丘規模は直径10.6*m*の円墳と推定できる。

石室は墳丘の中心からやや西に偏して構築されている。前述の如く、墳丘中央部は盗掘及び石材の抜き取りのため、殆んど原状を保っていないが、墳丘西側に石室造営のための土壙の切り込みを封土中に認め、東側は不明確であったが、地山面でわずかにその痕跡を認めた。土壙は下底部で 2.3*m*の幅を有す。土壙の全長は、盗掘や樹木の根による破壊が激しく明確にし得なかった。

墳丘の高さは、石室との関係からみて約 1.5*m*程度と

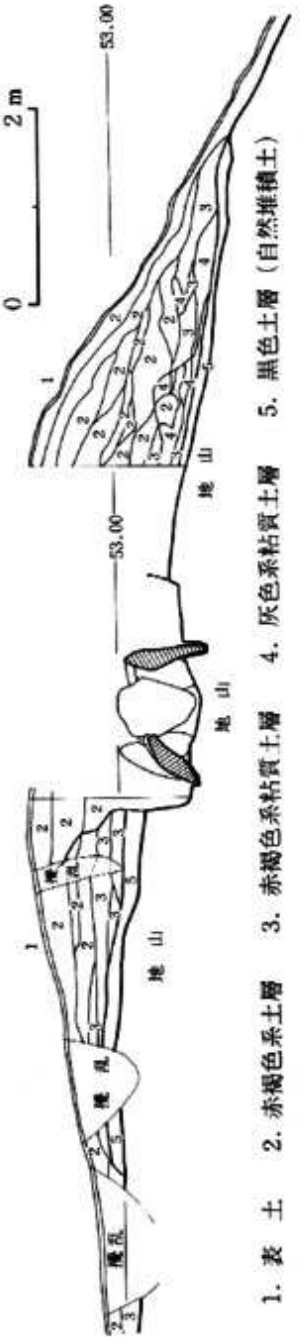


Fig. 16 2号墳墳丘土層図（東西トレンチ・西一東）

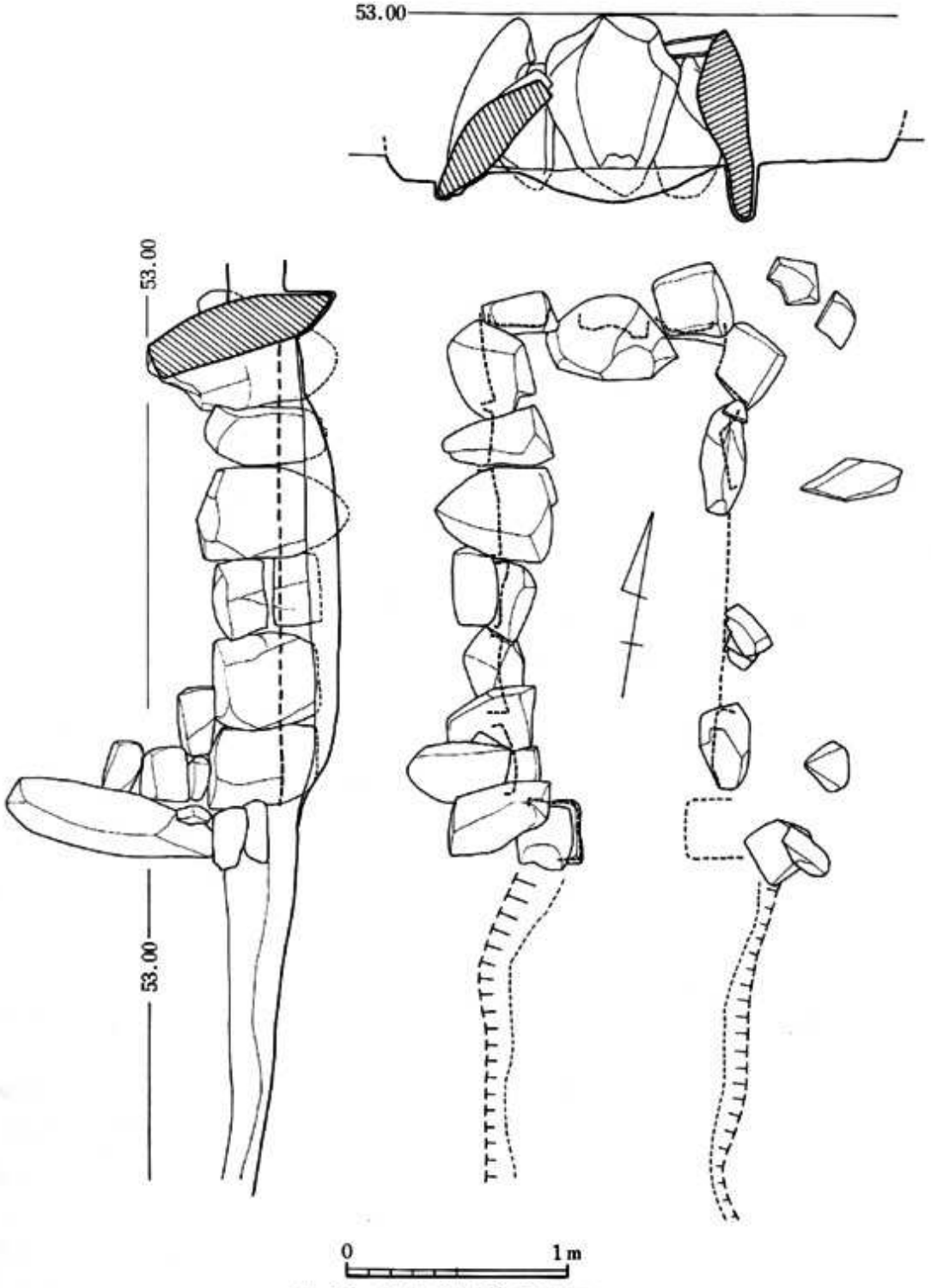


Fig. 17　2号墳石室実測図

推定される。墳丘が地形の傾斜変換点を巧みに利用しているため、視覚的には実高よりも高くみえる。

内 部 主 体 (Fig. 17、PL. 10)

2号墳の内部主体は全長 2.11*m*、奥壁部幅 1.1*m*、羨門部幅 0.9*m*の長方形プランを呈す単室の横口式石室である。石室主軸の方位は N20°Wでほぼ南北にとり、南に開口する。

石室は、腰石部だけを残して殆んど石材を抜き去られている。

腰石には幅約40cm、高さ約56cm程度の石材を用い、奥壁部を除いて上端面をほぼ水平にそろえ、その上に比較的大形の割石を小口積みしている。西壁玄門部では三段の小口積みがのこっていた。

奥壁部は幅60cm、高さ85cmの腰石に比してやや大形の石材中心に、左右に幅25cm、高さ60cm程度の石材を立てて構築している。両側壁の奥壁側は、奥壁を挾むように高さのある石材を用いている。

玄室壁面は一様に盗掘と土圧によって内傾しているが、本来はほぼ垂直であったと推定される。

石室床面は、地山に切りこんだ石室土壙の床面下まで盗掘で掘り下げられたため、原形を全くのこしていない。腰石の据え方からみて、約25cm程度盗掘時に床面を掘り下げたものとみられる。従って、腰石は本来30～40cm程度床面上にのぞいていたといえる。床面は礫床であったらしく、5cm台の河原石が若干室内の埋土から発見された。

羨門部の西側は比較的良く残っていたが、東側は殆んど破壊されていた。

羨門西側は高さ98cm、幅45cmの柱状の石材を西側壁に立てかけ袖石とし、その下部に割石を二段に積んで支えとしている。東側も同様な構造であったとすれば、羨門の幅は約60cm程度のものといえよう。石室の高さは羨門袖石からみて約1.25*m*程度といえよう。

前庭部の袖石は東壁の一部とみられる石材だけがのこっているが、本来短いものであったと推定される。墓道は前庭部の破壊で明瞭ではないが、墓道らしき痕跡が、幅 1.2*m*で羨門部からわずかに登りつつ続いていた。破壊が激しいため原形を残すか否か断定できなかった。

石材は一部に花崗岩を認めるが、大半は千枚岩である。石室壁面には、1号墳同様赤色顔料の塗布を全く認めなかった。また、遺物は破片1点すら発見できなかった。

本古墳の石室は、羽子板型の平面プランを有し、腰石上に小口積みする単室の横口式石室で、類似する石室は京都平野では本墳の東に存す苅田町番塚古墳及び京都平野内陸部の勝山町箕田中原古墳群(註)がある。これらの石室は、竪穴系横口式石室の末期的様相を示すものといえよう。

(註) 定村 貴二 「箕田中原古墳調査報告」奈良古文化19 1969。

第3章　総　　括

1. 猪熊古墳群の年代と性格

福岡県京都郡苅田町大字新津字イモリ 811に所在する猪熊古墳群は、二基の円墳からなり、発掘の結果、1号墳は全長 3.32mの竪穴式石室墳で、2号墳は全長 2.11mの単室横口式石室であることが判明した。所謂後期古墳群と相違し、二基だけで古墳の造営が終っていることが注目される。

全長3.32m、幅1.63m、高さ約1.65mを測る1号墳石室と類似する竪穴式石室を有す古墳に本墳の西南3kmに位置する行橋市延永のビワノクマ古墳がある。この古墳は小波瀬川と長峡川にはさまれた舌状台地上に立地する径 25mの独立円墳で、竪穴式石室は全長 3.58m、幅 1.29m、高さ 1.7mの規模をもち、1号墳に比べてやや狭長で大型である。副葬品には、鏡・勾玉・小玉・素環頭大刀・短剣・鉄鏃・鍬先などの他、挂甲小札類がある。ビワノクマ古墳の他に京都平野には竪穴式石室墳として5世紀中葉代の稲童19号墳がある。この石室は全長2m、幅0.51～0.31m、高さ 0.4mの箱式石棺のプランに類似した小形の竪穴式石室で鋤先、管玉、ガラス小玉などが副葬品の一部として検出されている。この種の小形の竪穴式石室は、北九州市小倉南区の今村清川町古墳にもみられ、仿製鏡、ガラス小玉、銀製空玉、勾玉、鉄刀などを副葬し、5世紀中葉代に比定されるものである。

これらの竪穴式石室に比して、1号墳石室は側壁石材の大形化、簡略化した控え積み、赤色顔料のみられぬ点など新しい要素を認める。石室平面プランも本墳の場合、竪穴式石室としては幅広で竪穴系横口式石室を有す番塚の玄室プランに類似する点が注目される。本墳の北東2kmに所在する番塚古墳は第1章でのべた如く、竪穴系横口式石室を有す前方後円墳で、その玄室は長さ 3.50m、奥壁部幅2m、羨門部幅 1.5m、高さ 1.8mのプランを有し、須恵器第Ⅰ・Ⅱ様式の副葬をみ、5世紀末から6世紀初頭の年代に比定される。番塚の石室平面は佐賀県関行丸古墳と類似し、羨門部で狭ばまる羽子板形をなすが、今石室幅を中間（平均）の1.57mとすれば、幅と長さの比は2、高さは1となり、全く本墳と一致する企画を有すこととなる。

以上の如く、1号墳は石室構造からいえば、ビワノクマ古墳と番塚の間に位置することとなり、年代的には5世紀後半から5世紀末に求めうる。この年代は、副葬品の鉄覆輪鋲留式短甲及び衝角付冑の組み合わせとも矛盾しない。本墳の短甲は、出土破片からは三角板か横矧板か断定できなかったが、この年代から言えば横矧板の可能性が強いといえよう。

九州に於ける甲冑出土例の内、横矧板鋲留式短甲は36例、横矧板鋲留式衝角付冑は9例を

み、近畿地方に次ぐ出土例を認める。この9例の横矧板鋲留式衝角付冑と伴出する甲は、5例が横矧板鋲留式短甲であり、その他熊本県江田船山古墳では横矧板革綴短甲、横矧板鋲留短甲、福岡県塚堂古墳では三角板鋲留短甲・横矧板革綴短甲・横矧板鋲留短甲である。さらに福岡県山ノ神古墳では挂甲を伴出している。これらの出土例をもとに村井嵓雄氏は横矧板鋲留式衝角付冑が一般に横矧板鋲留式短甲と共伴し、5世紀末あるいは6世紀前半代に比定されるとしている。(註7)

豊前京都地方の短甲出土の古墳は周防灘沿岸部の稲童古墳群に多くみられる。この古墳群では、5世紀前半の15号墳(註8)から竪矧板革綴短甲が、5世紀後半の21号墳(註2)から眉庇付冑と共伴して三角板鋲留式短甲と横矧板鋲留式短甲が、さらに5世紀末～6世紀初頭の8号墳(註9)から横矧板鋲留式短甲が衝角付冑と共伴して発見された。さらに内陸部の例としては犀川町長迫古墳(註6)の横矧板鋲留式短甲が挙げられる。これら本地方の短甲出土の古墳も5世紀後半～6世紀初頭の年代に集中している。

従って、石室構造及び副葬品の甲冑類から推定される猪熊1号墳の年代は、番塚よりやや上る5世紀末といえよう。2号墳石室は所謂竪穴系横口式石室の発展形態を示し、1号墳に後続する。

2号墳石室に類似するものに勝山町の箕田中原古墳群(註10)がある。中でもその8号墳は、本墳と酷似した石室を有し、鉄刀・剣・刀子・管玉・ガラス小玉の他第Ⅱ様式の須恵器（坏）を出土し、6世紀初に比定されている。また、羨門部にむかって幅の狭ばまる羽子板形プランは番塚にも通ずる特色である。

本古墳群の1号・2号墳は石室構造に大きな相違点があるものの、5世紀末～6世紀初頭まで連続した古墳群といえる。

豊前京都地方に於ける竪穴系横口式石室の導入は、現状では稲童21号墳に求めることができる。稲童古墳群は、帆立貝式前方後円墳の石並古墳（20号墳）を主墳とする古墳群で、石蓋土壙、箱式石棺、小竪穴式石室、竪穴系横口式石室、横穴式石室へと内部主体の変遷をたどりえ、系譜的に連続する伝統的在地勢力の累積的墓域と推される。(註11)

本古墳群の場合、同一丘陵上には二基の古墳しか構築されていないが、本墳とほぼ同時期に比定されるビワノクマ、御所山、番塚の各古墳が隣接しており、本古墳群の石室企画及び羽子板プランの平面形など番塚と共通する点が多いことから、これらの古墳を包含する小波瀬古墳群の一環として把握すべきであろう。この観点によれば、小波瀬古墳群は御所山、番塚の二前方後円墳を主墳とし、5世紀後半から6世紀初頭まで連続することとなり、御所山古墳にみる石障構造及び番塚の佐賀県関行丸古墳や佐賀県目達原古墳群中の塚山、大塚の石室に類似した羽子板形プランの竪穴系横口式石室など筑肥地方の影響の強い性格を窺うことができる。(註12)この特色は、本地方の在地首長層が卓越した実力を誇る筑紫国造家の影響下に入ってゆく過程を示(註13)

すといえよう。

5世紀代の本地方には京都平野沿岸部に入江をはさんで北に小波瀬古墳群、南に稲童古墳群が対峙することとなる。この二勢力は、系譜的には相違すると思えるが、共に甲冑、馬具を中心とする豊富な武人的副葬品にみる如く、5世紀代の朝鮮出兵に活躍した在地首長層であり、その従軍の中で大和朝廷の統制と共に筑紫国造家の影響を強く受け、所謂九州型古墳文化の圏内に入ったものと言えよう。前方後円墳の規模からみて、この関係は小波瀬古墳群の方がより直接的で、石障という本地方では異例な構造を有す壮大な御所山古墳を現出した歴史的背景もここに求められよう。換言すれば、本来朝廷色の濃厚であった本地域が、九州の在地勢力たる筑紫国造家の影響下に次第に組みこまれてゆく姿をみることができる。

小波瀬及び稲童両古墳群はともに6世紀前半代をもって、急激にその内容を失い衰退の途をたどるが、これは磐井の反乱の影響であり、屯倉の設置を通じ、大和朝廷権力の浸透で再び豊前本来の性格にひきもどされてゆくのである。

2. 豊前京都地方の古墳文化

九州の北端、瀬戸内の西端に位置する豊前地方は、その地理的条件によって大陸・半島への通廊として、又、畿内・東瀬戸内文化導入の門戸としての二面性を有す。

畿内大和政権の波及を示す前方後円墳の伝播に於いても、苅田町南原の石塚山古墳にみる如く、九州最古の畿内型古墳の出現地として知られている。石塚山古墳はその出土鏡中の五面に及ぶ同笵鏡[註14]から、大分県赤塚、福岡県原口及び御陵古墳との間に分有関係を認め、九州に於ける最古式前方後円墳を有機的に結ぶ中枢をなす。さらに、京都府大塚山古墳・岡山県車塚との分有関係も認められ、畿内大和政権の九州進出の重要拠点としての性格を窺うことができる。

石塚山古墳が象徴する畿内型古墳の波及と相前後して、豊前地方にも近年その類例をます発生期の古墳（初期古墳）が認められる。行橋市竹並遺跡[註15]の丘陵尾根上には箱式石棺・石蓋土壙・粘土槨（木棺墓）を主体とする方墳及び円墳があり、竹並の東方・周防灘の浜堤上に立地する稲童11号墳[註16]がある。稲童11号墳は、内部主体に粘土槨（木棺墓）及び大小二基の石蓋土壙を有し、刀子片と推定される小鉄片の副葬品[註17]を検出している。京都郡北方の北九州市小倉南区長行の郷屋遺跡[註18]も初期の古墳で、円形の同一封土中に2基の大型箱式石棺と2基の箱式石棺を有す。副葬品に後漢末の作と推定される三角縁四禽文鏡、素環頭刀などがある。この古墳の周囲には弥生終末期の箱式石棺及び石蓋土壙墓群を認める。

これらの遺跡は年代的に石塚山古墳出現前にのぼる可能性が強い。豊前京都地方と同様に最古式の畿内型古墳を有す宇佐地方に於いても赤塚古墳出現前に箱式石棺を主体とする方形の古稲荷古墳が存在することが確認されている。[註19]従って、在地性の強い伝統的な箱式石棺・石蓋土

壙・木棺を主体とする初期古墳の造営が先行し、その後に所謂畿内型古墳の出現をみるといえよう。九州に於ける在地性の強い初期古墳と畿内型古墳との間は、樋口隆康氏が説く如くプロトではなくプレの関係にあり、大和政権の国家統一の過程で、統合の象徴として定型化した畿内型古墳が周防灘沿岸部に波及し、やがて、5世紀代にほぼ九州全域をおさえるといえよう。(註21)

畿内型古墳波及後も初期古墳のタイプは存続するが、畿内大和政権の地方支配強化につれて、次第にその主体性と伝統を失いつつ、畿内から波及した"古墳"の中に埋没する。この様相の一端として、伝統的在地墓制の箱式石棺が竪穴式石室化してゆく展開があげられる。(註21) 豊前地方に於いては、5世紀代まで箱式石棺を主体とする小円墳が存続している。

苅田町には石塚山古墳の他に前方後円墳としては、5世紀後半の御所山古墳、6世紀初頭の番塚古墳がある。石塚山古墳と御所山古墳との間に少なくとも1世紀に及ぶ断絶を認めるが、これは単なる年代的な断絶ばかりでなく、両者間の系譜的（血縁的）相異を示すとも考えられる。宇佐地方の赤塚古墳→免ケ平古墳→春日山古墳→車坂古墳→鶴見古墳へと同一古墳群中で前方後円墳が展開し、連続する宇佐国造家累代の奥津城をなす赤塚古墳の場合と比べて、内部主体の相異と共に極めて対照的である。(註19) 赤塚古墳成立の背景として、古稲荷古墳さらに弥生期の東上田・高居・台ノ原・別府遺跡などが駅館川流域の同一平野にある事と、弥生遺跡の稀薄な地域に立地する石塚山古墳とは対照的である。現状では、石塚山古墳成立の背景を沿岸部の苅田の在地勢力に見出し難く、石塚山古墳の被葬者は大和政権が派遣した人物である可能性を秘めているといえよう。

豊前京都地方の古墳文化は朝廷の朝鮮出兵の本格化する5世紀代に入ると質量共に発展し、竪穴系横口式石室や石障など筑肥地区の様相が導入される。

苅田地区の石障を有す御所山古墳、竪穴系横口式石室の番塚古墳の他、行橋市稲童地区の帆立貝式の石並古墳（稲童20号墳）、勝山地区の扇八幡古墳などの前方後円墳があらわれる。(註12)(註4)(註11) これらの前方後円墳はそれぞれの地区の古墳群の主墳を構成している。また、この時期に甲冑などの多量の鉄製武器をもつ円墳の出現がめだつ。挂甲小札、素環頭太刀、鉄鏃、馬具など副葬のビワノクマ古墳、竪矧板式短甲、鉄剣などを副葬の稲童15号墳、三角板鋲留短甲、横矧板鋲留短甲、眉庇式冑、刀剣、馬具など副葬の稲童21号墳、横矧板式短甲、衝角付冑、鉄鉾、馬具など副葬の稲童8号墳、横矧板鋲留短甲、刀などを副葬する犀川町長迫古墳などがあり、今回報告する猪熊1号墳も横矧板鋲留短甲、衝角付冑を有しこれらの古墳と類似する性格を有している。(註1)(註8)(註2)(註9)(註6) 筑紫国造と共に朝鮮経営に活躍した在地首長層の姿を彷彿させる。

6世紀に入ると各地に小円墳の群集する古墳群の成立をみることが注目される。苅田町では松山古墳群、松陰古墳群、黒添古墳群があり、行橋市竹並遺跡では横穴だけで2,000基を越えるという正しく爆発的な数値を示す。(註16) また勝山町の黒田地区では莫大な後期古墳群に混じって、寺田川・庄屋塚・箕田丸山の前方後円墳があり、綾塚、橘塚の巨石墳が存在し、6世紀代(註22)(註22)

の豊前京都地方で最も充実した姿を示している。この黒田地区の発展に比して、5世紀代の豊前京都地方に於ける中心勢力たる小波瀬古墳群（与原地区）及び行橋市稲童古墳群の衰退が目立つ。すなわち、与原地区では番塚古墳の造営をもって前方後円墳が消滅し、稲童古墳群では墳丘及び石室構造の縮小が顕著で普遍的な小円墳群へと変質する。この背景として磐井の反乱の持つ意義は大きく、新たな大和朝廷の統制が想定される。

磐井の乱後、安閑天皇二年（535）に設置された屯倉の内、九州では筑紫国の穂波・鎌の二屯倉、豊国の膳碕、桑原、肝等、大抜、我鹿の五屯倉、火国の春日部屯倉があり、屯倉の設置を通じて大和朝廷の北九州に対する官司制的な支配体制がおしすすめられる。中でも、膳碕（北九州市門司区？）、大抜（北九州市小倉南区貫）、肝等（苅田）の如く、豊前の周防灘沿岸部に南北に連続して集中していることは、筑後国風土記にみえる磐井が豊前国上膳県（築上郡）にのがれたという記録と合わせて極めて興味深い特色である。

九州の国造がある程度の自立性を残して、君（公）姓を一般とする中で唯一の直姓を有す豊国造は「九州ではむしろ特殊な国造であった」[註23]とする性格は、安閑天皇代の屯倉設置によって一段と強化されたものと思える。豊前京都地方に対する強力な大和政権の浸透・統制は、石塚山古墳が象徴する4世紀にその第一波があり、磐井の乱後の屯倉設置がその第二波といえよう。第二波の規制は、半島出兵という政治的背景を契機に大和朝廷から次第に自立化し筑紫国造との連携を深めた豊前に対し、九州統治における豊前本来の機能に引き戻すためであったといえよう。　（1976.8.31　稿了）

※ おわりに

本稿を草するに当り、小田富士雄氏から未発表の浜町遺跡出土土師器実測図の提供を受けた。記して感謝申し上げる次第である。

なお、発掘中に同僚の梶原弁二氏及び遺物写真撮影に際して、曽塚孝氏の協力を得た。併せて感謝申し上げる次第である。

第3章　脚　注

註1　鏡山猛「福岡県行橋市琵琶隈古墳」考古学年報8　1955。

註2　大川清編「福岡県行橋市稲童古墳群第2次調査抄報」1965。

註3　山中英彦「今村清川町古墳」（北九州市の埋蔵文化財）北九州市文化財調査報告書16　1976所収。

註4　渡辺正気「番塚」苅田町　1960。

註5　渡辺正気「佐賀市関行丸古墳」佐賀県文化財調査報告7　1958。

註6　小田富士雄・石松好雄「九州古墳発見甲冑地名表補訂」九州考古学24　1965。

註7　村井嵩雄「衝角付冑の系譜」東京国立博物館研究紀要9　1974。

註8　小田富士雄「福岡県行橋市海岸の弥生式墳墓」九州考古学11・12　1961。

註9　大川清編「福岡県行橋市稲童古墳群第1次調査抄報」1964。

註10　定村貴二「筑田中原古墳調査報告」美夜古文化19　1969。

註11　小田富士雄「福岡県行橋市石並前方後円墳」美夜古文化18　1967。

註12　石山勲「史跡御所山古墳保存管理計画策定報告書」苅田町教育委員会　1976。及び同書所収　坪井正五郎「豊前京都郡与原村の古墳」。

註13　松尾禎作「目達原古墳群発掘調査報告」佐賀県史跡名勝天然記念物調査報告9　1950。

註14　小林行雄「古墳時代の研究」1961。

註15　西谷正、下条信行、佐田茂、木村幾太郎、島津義昭「九州考古学の諸問題」同書所収　1975。

註16　赤崎敏男「竹並遺跡一福岡県行橋市竹並所在遺跡の調査概報(1)—」1974。
佐田茂、赤崎敏男、村上久和、長嶺正秀「豊前・竹並遺跡の調査」九州考古学51　1976。

註17　昭和40年の早稲田大学による同古墳群第3次調査。

註18　山中英彦「郷屋遺跡」一北九州市の埋蔵文化財一北九州市文化財報告16　1976所収。

註19　小田富士雄、真野和夫、小倉正五「豊前・宇佐地方における古式古墳の調査」考古学雑誌60—2　1974。

註20　樋口隆康「九州古墳墓の性格」史林38—3　1955。

註21　山中英彦「東宮ノ尾古墳群」北九州市文化財調査報告14　1974。

註22　小田富士雄「横穴式石室古墳における複室構造の形成」史淵100　1968。

註23　井上辰雄「筑・豊・肥の豪族と大和朝廷」古代の日本3九州　1970。

PLATE

猪熊古墳群付近航空写真

1.石塚山古墳　2.番塚　3.御所山古墳　4.猪熊古墳

(1) 猪熊古墳群遠景(北から)

(2) 猪熊古墳群遠景(南から)

1号墳墳丘(南から)

1号墳墳丘(北から)

1号墳石室全景(南から，手前の石組の乱れは盗掘のため)

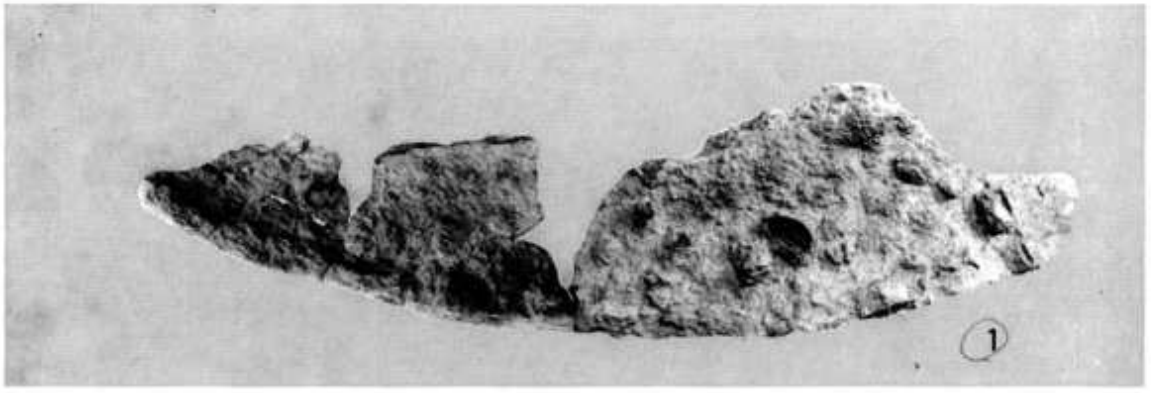
1号墳石室北壁(奥壁)

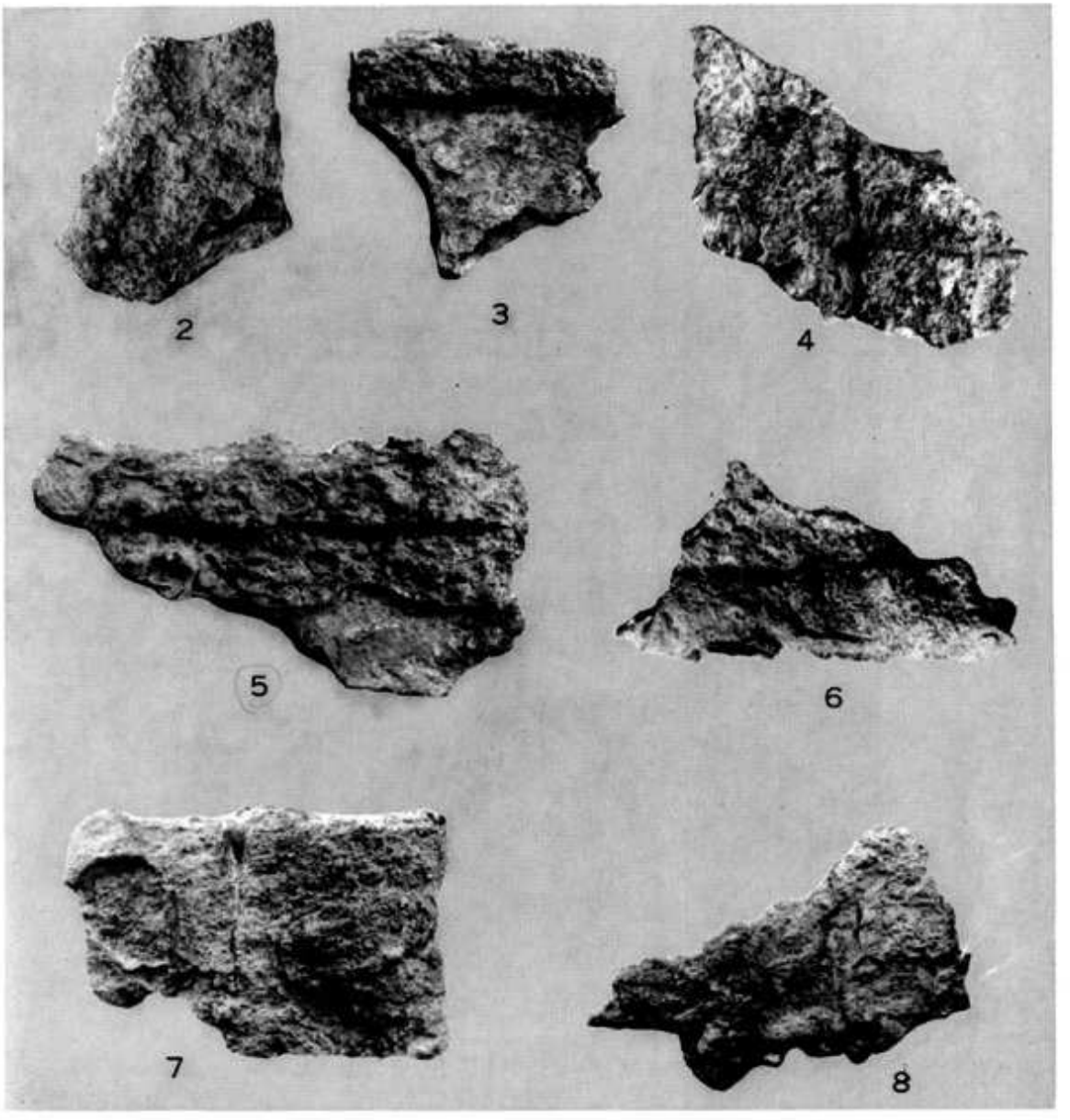
1号墳石室北壁の構造

1号墳石室北西部コーナーの状態

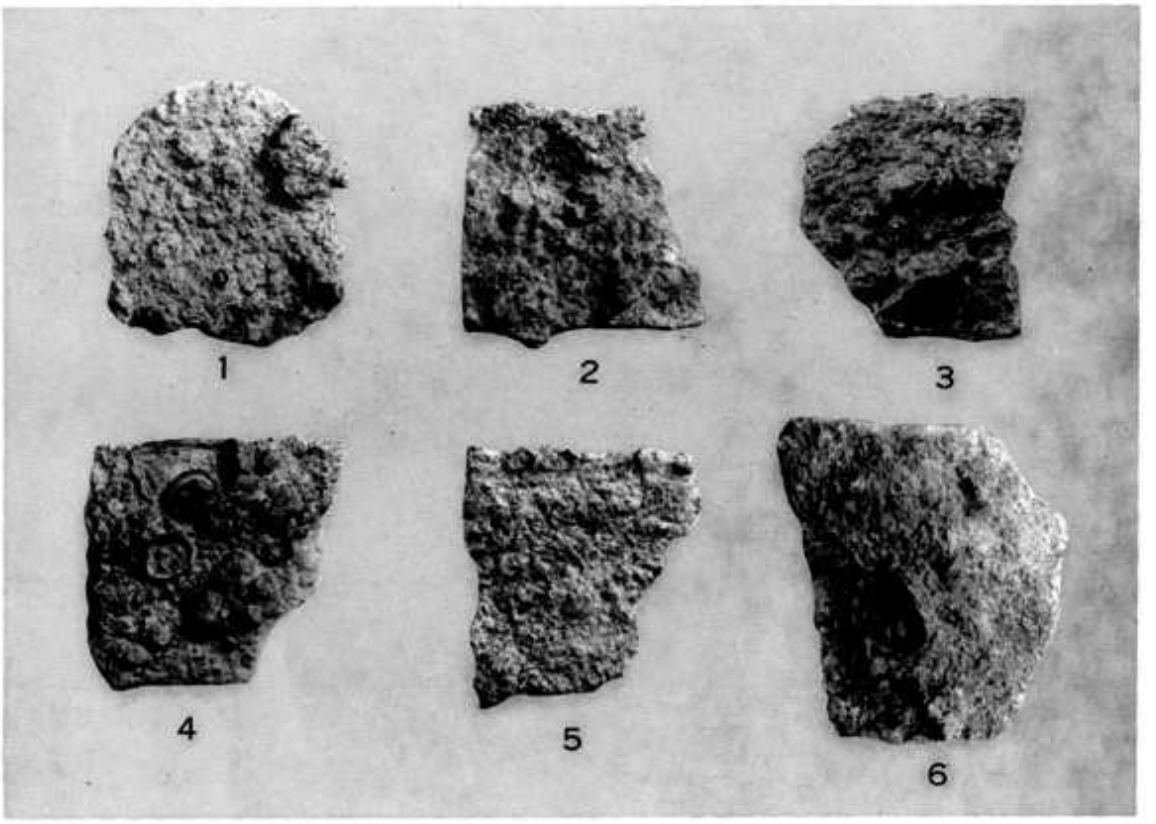
1号墳石室西壁の状態

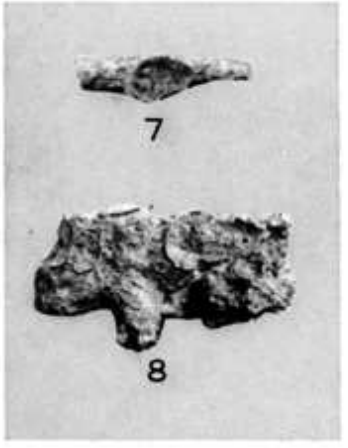
1号墳出土甲冑類（1～5……短甲、6～8……衝角付冑）（1のみ½、他は実大）

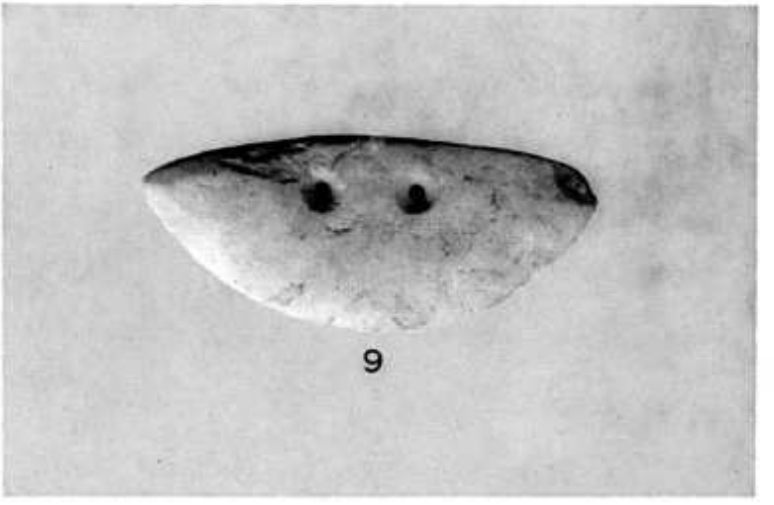




1号墳出土遺物(Ⅱ)







1～6……小札類、7……鉄鏃片、8……刀子片、9……封土中発見の石庖丁
(1～8　実大、9……½)

2号墳墳丘(西から)

2号墳墳丘(南から)

2号墳石室全景

猪熊古墳群

—福岡県京都郡苅田町所在の古式古墳群の調査—

昭和51年8月31日

発行　猪熊古墳群発掘調査団

山中英彦

北九州市小倉北区赤坂三丁目3番2-304号

TEL（093）541-3473

苅田町土地開発公社

苅田町富久町一丁目19—1

印刷　冷牟田印刷合資会社

北九州市八幡西区光明二丁目11番14号

電話（093）601-1717（代表）